

ISSN 1882-0190

甲南女子大学

# 英 文 学 研 究

**STUDIES IN ENGLISH LITERATURE**

*Konan Women's University*

第 四 十 四 号

Volume 44

( 2 0 0 8 年 )

甲南女子大学英文学会  
Konan Women's University English Literature Society

平成20年3月31日 発行  
Issued March 31st, 2008

目 次  
*Contents*

---

立ち昇る香り——ミルトンの『樂園喪失』における改悛の祈り  
..... 倉恒 澄子 .....1

The Incense-Clad Prayers: The Repentance of Adam and Eve in  
Milton's *Paradise Lost*  
.....KURATSUNE Sumiko

『ルース』にみられるエリザベス・ギヤスケルの教育観  
.....越川 菜穂子 .....15

Elizabeth Gaskell's Views of Education Found in *Ruth*  
..... KOSHIKAWA Naoko

★ ★ ★

『クリスマス・ストーリーズ』  
.....藤本 隆康訳 .....24

Charles Dickens, *Christmas Stories*  
..... Tr. By FUJIMOTO Takayasu

## 『クリスマス・ストーリーズ』

チャールズ・ディケンズ作

藤本 隆康訳

『クリスマス・ストーリーズ』は最初、『ハウスホールド・ワーズ』と『オール・ザ・イア・ラウンド』に掲載され、大半の物語は一八七一年に出されたチャールズ・ディケンズ・エディションに、上述のタイトルで作品が集められている。現在の版はこれらの雑誌のクリスマス特別号のために書かれた追加の作品も含まれている。

ディケンズは数編の物語で他の執筆者の手を借りている。特に、「ゴールデン・メアリ号の難破」、「海からのメッセージ」、「往来止め」そして「二人の怠惰な徒弟のものぐさな旅」は、ウィルキー・コリンズと共同執筆したものである。一八七一年版に従って、他の執筆者の手によって書かれたことが明らかになっている作品は、この版でも省いた。

挿絵は、一八七一年のチャールズ・ディケンズ版、そして一八七四年のイラストレイティッド・ライブラリー版に掲載されたものを使っている。

### 序

マーガレット・レイン

本書に掲載された作品は、ディケンズが中年の円熟期に達した頃、つまり『デイヴィッド・コパーフィールド』から『エドウィン・ドルードの謎』が出るまでの、繁忙をきわめた十七年間に書かれたものである。これらの作品は、ある意味ではささやかな小品で、人生でも仕事でも枯渇することのない火山を思わせるような彼の活力からこぼれ出ただけのものと言っていい。それでもやはり、控え目なレベルではあるが、読むに値する作品であることに変わりはないのである。

本書を一気に読み通そうとするは間違っている。これは、枕元に置いて読むのがいちばんふさわしい書物で、順を追って少しずつ目を通していくのがいい。と言うのも、一八五〇年に「クリスマス・ツリー」を書いたディケンズと一八六七年に「往来止め」を書いたディケンズには大きな変化が見られるからである。『クリスマス・ストーリーズ』は、実際のところ、ディケンズにおける重要な変化を映すものとして読むことができ、彼自身の人生を背景にして読めば、きわめて多くのものが得られるのである。

ディケンズは、三十八歳の絶頂期にあつて、『デイヴィッド・コパーフィールド』を執筆している最中に、さらに膨大な数の大衆とより親密に触れ合う手段として、二ペニーの週刊紙『ハウスホールド・ワーズ』の編集に乗り出した。それは、小説ではなかなかできない、時事問題に対する彼の見解を直接述べる場となるものだった。それはまた、家族が揃って読んで楽しむものになる予定だった。そして毎年の年末には、主なクリスマスの呼び物として、ディケンズ自身が長い短編を書くことにしていた。

本書に載せられた最初の数編は、この伝統的な枠の中にきちんと納まっている。それらの作品では、クリスマスの時期にわれわれが期待するようになったディケンズのクリスマス精神がそのまま表れている——気楽で、優しく、子供の頃の記憶に満ち溢れ、子供の遊びや、幽霊の話、焼き栗、家族芝居に夢中になり、さらにあの「積極的に役立とうとする気持ち、忍耐、快活に義務を果たすこと、親切と寛容といったクリスマス精神」への熱い思いが感じられる。時には感傷が入り込んでくるが、鼻につくほどではない。活力に溢れていて、感傷に浸る間もないのである。これらの作品は、家族内や、あまり批判的にならず聞くのを楽しみたいと思っている老若男女の集まりで朗読するために書かれたものなのである。そしてこれらの物語を正しいやり方で利用する人は、それらが立派に目的を叶えてくれることが分かるのである。

しかしすぐに劇的な変化が現れる。語り手の声が深みを増すのである。パチパチと弾ける暖炉の火の周りに集まって、暖かく、美味しいものを食べ、満ち足りて幸せな家族の団欒を楽しんでいた人たちは、プラシ天のカーテン、そして厚い壁の外にいやでも目を向けさせられ、それまでなかった不快で急進的な別の声に耳を傾けさせられるのである。ディケンズは、彼の生涯をほとんど知らない人たちから、社会改革家として蔑まれてきた。実際、彼はあらゆる形の社会の不正に対して倦むことを知らず抗議の烽火<sup>のろし</sup>を上げ続け、さまざまな革新的な大義のために、驚くほど多くの時間と精力を注いでいた——それは、彼ほどの人間でない限り、その全ての創造力を使い果たしてしまいそうなほどの活動だった。楽しい話を予想して『ハウスホールド・ワーズ』誌のクリスマス版を開いた読者は、そこに「無名の人物語」を見て、きっと興を冷まされ、失望したことであろう。その話は、ディケンズの怒りの声であり、イギリスで貧しい人たちがこのまま打ち捨てられていたら、必ずそれが革命の引き金になるという彼の密かな確信の声だったからである。「人々は、今耐えていても、もうこれ以上は耐え切れなんでしょう」と彼は、一八五五年にミス・バーデット・クーツに送った手紙の中で書いている。「それは、どこにでも認めることのできる、全ての現実の兆候に現れていることで分かります。そして私はそうした人たちと彼らの怒りの間に緩衝になるものを置きたいと願っています。この点だけから言うと、私は心の底から「改革家」です。私に得るものはありません——失うものばかりです（大衆が落ち着くことが私の生きる糧だからです）——しかし私はどこまでも必死です。これが絶望的な状態だと分かっているからです」「無名の人物語」で語られるのは、これと同じように真剣で切実な声である。

私は[貧民街に住む名もない住民が、貧民窟の汚染が疫病を蔓延させていると非難された時に言ったことであるが] ほとんどの災いが、それと同じように、私たちから生ずること、そして私たちの貧しい家の戸口でそれを留めることができないことが少し分かり始めました。私たちを支配しようとする人たちが手段を講じてくれない限り、私たちは健康的でちゃんとした暮らしはできず、彼らが私たちに教えてくれない限り私たちの心は開かず、彼らが私たちを楽しませてくれない限り正常に楽しむことはできないのです。…… 人の命を無視することによって起こるこうした有害な結果、そして人間らしい娯楽を不自然に抑制したり否定したりすることによって生ずる有害な結果は、すべて私たちから生まれ、私たちだけに留まらないものになっていくのです。その害悪は遠く広く、広がっていくでしょう。いつもそうですし、これまでもずっとそうでした——疫病と同じようなものです。やっと、これだけのことが分かったような気がします。

しかし、ディケンズはクリスマスの物語を説教に変えたことで、誤りは犯さなかった。彼は娯楽作家として、自分のやるべきことを十二分に弁えていた。そして人に飲ます丸薬に、香料と砂糖を巧妙に調合しているのである。私たちは「七人の貧しい旅人たち」の最初の章で笑いを誘われ、そして読み進めて行くうちに養老院の貧しい老人たちがあさましく描かれているという事実を読み取るのである。彼は短い物語を書くのに渾身の努力を傾けた。おそらく彼は、それが自分の能力に合った最善の文学形式ではないと意識していたのであろう。彼の才能は横溢するほど豊かで、限られた範囲には容易に収まらず、彼の書く物語には次々とその才能が取りとめもなく溢れ出て、きちんとした結末に辿り着く代りに、もっと魅力のある、奇妙で滑稽な兎（対象）を追いかけて行くのである。しかし、伝統的な物語の語り手の手法から離れることによって、予想だにしない楽しい結果が生まれるのである。ディケンズの思いからすると、クリスマスは幽霊の話をする時節であり、彼は日雇い人夫よろしく、せっせとクリスマスに困んだ話を製造していた。しかし彼自身の懐疑心が絶えず諧謔的な形で話に割り込んできて、彼自身が売り込もうとする商品そのものを楽しげに嘲笑しているのである。「幽霊屋敷」が実際にボウリィの牧師館<sup>1)</sup>と同じように幽霊に取り憑かれているわけではない（ボウリィの牧師館を調査したある人たちと同じように、「梟<sup>ふくろう</sup>と暮らす頭巾を被った婦人」とか他の面白おかしい戯言を本気で受け入れることができれば話は別である）。屋敷に行く途中に、汽車で遭遇する超自然論者は心霊研究協会の業績に匹敵する証拠を提供しているのである、

「夜の会議は」と紳士は何ページか手帳をめくって話を続けた、「『邪悪な交信は、礼儀正しさを失わせる』』という言葉で始まりました」

「もっともです」と私は言った、「ですが、まったく新しいことなんですか？」

「霊から言えばそうです」と紳士が答えた。

私はまた少々ぶっきらぼうに、「やれまあ！」と繰り返すしかなく、最後の交信について話し

てもらえませんかと頼むのがやっとだった。

「手中の一羽は」と、彼は書き込みを見ながら、真面目くさって言った、「やぶの中の二羽の価値がある」

「たしかに、それには異存ありません」と私は言った、「でも、やぶではありませんか？」

「そんな風に聞こえたんです、やぶと」と紳士が答えた。

『ハウスホールド・ワーズ』やその後継雑誌である『オール・ザ・イア・ラウンド』に載せられた数多くの物語はウィルキー・コリンズとの共同執筆によるものだった。それは実際的なやり方ではあったが、うまく行ったとは言えなかった。ディケンズは二頭立て用の馬具を使いこなせるような作家ではなかったからである。コリンズが得意とする入念な筋立ては、ディケンズの空想やヒューマーの自然な働きを窮屈にするものだった。ディケンズが自分で書いたとされる章でさえ、何か束縛されて書かれている感じがするのである。この二人の作家は共同執筆にあたって労を厭わず、必要と思われる時には共に地方に足を運び、着想の材料を熱心に求めて粗末なホテルに泊るといった苦勞に耐えていた。ディケンズは「私たちは夕食に厭な臭いのする魚を食べました」と、『海からのメッセージ』を書くための地方色を肌で感じるために訪れていたビディフォードから書き送り、「ワイン、ビール、水割りのブランデーを注文したのに、何も口にすることができませんでした。旅館には、タルトが二つと、ろうそくの芯切りしかありません」と付言している。こうした状況は彼に馴染めないものではあったが、期待を裏切ったのは臭い魚よりもコリンズが存在だったのではないかと感じられる。一人になると、ディケンズは荒果てて行く旅館の姿や旅の変遷を見事に描いたのである。

もちろん、ディケンズの抑制のきかない諧謔心がプロットをそこ退けにして、一気にナンセンスな話に移るとき、現代の読者は何よりもそれを楽しむのである。『ドンビィ』とか『マーティン・チャズルウィット』に挿入されていたらずっと前から有名なものになっていたと思われる断片的な描写が随所にあって、それらは何世代にも亘って読まれないまま屋根裏部屋で眠っていて、とりわけ『クリスマス・ストーリーズ』はそうした隅に放って置かれていた作品であるが、それが日の目を見ることによって数々の事実が新たに明らかになっている。「誰かの荷物」に登場する給仕頭は、なぜ主要な小説の中で然るべき地位を占められなかったのであろうか？この給仕頭をただ本格的な小説から溢れ出た人物として見做すのは不合理とは言え、明らかに彼はそうした人物として描かれているのである。彼はヴィクトリア朝のコーヒー店の情景の一部に溶け込んでいて、空気を吸っているというよりは、湿ったおが屑や腐った薬味の臭気を吸っているように思われるのである。

私たちは一般に食事を振舞う仕事はしていないし、それを望んでもいない。従って、食事目当ての客が店に立ち寄ると、もう二度と来ないようにするために、どんな食事を出せばいいか弁えている。私たちは私室、あるいは家族のようなものである。しかしコーヒー店では主人で

ある。私と住所氏名録と筆記用具とコーヒーの滓を入れる桶が専用の場所を占めている——その場所はコーヒー店の端を一、二段上がったところにあつて、私に言わせれば古風でなかなかの場所である。あなたが何を望もうと、ウェイファーにいたるまで古風でなかなかのものであり、何から何まで給仕頭の機嫌に左右されるのである。あなた方は生まれたての赤子のように彼の手に身を委ねなければならない。大陸の悪徳に染まっていない仕事を行う他に道はないのである。

イギリスのサービス業に携わる人たちは、ディケンズが時折り見せるこうした容赦のない嘲笑を気に留めたことがあるであろうか？ もちろんあるはずがない。「マグビー・ジャンクション」の食堂の従業員は今日のいかなる地方の鉄道駅で見られるよりもくつろいでいて、スニッフ夫人はその圧倒的な才能でさらなる活動の余地を持っている。

彼女はまさにそうだ！ 彼女は、気がつくと、こちらが彼女を見ている時には、常にあらぬ方を見ている女だった。彼女は小さな腰をした女で前にバックルをきつく留め、手首にはレースの袖をつけ、それを正面のカウンターの端に置き、皆が怒っても、その袖を撫でていた。皆が怒っている時にこうして袖口を撫でたり、あらぬ方向を見つめたりすることは、マグビーにやって来る婦人たちにわが女主人が教えられる最後の身だしなみで、常にスニッフ夫人によって教え込まれるのである。

ある人物の伝記的な背景を知って、ますますその人物の作品を楽しむようになる読者にとって、ディケンズのクリスマス物語に対する興味はまた格別である。それらの物語が、十七年に亘るディケンズ自身に起こった何らかの変化を反映しているからである。その時期はディケンズが世間で最も有名になった頃から始まっている——有名になり、なおも若さを誇り、さらに幸せな結婚を果たし、創作力も旺盛で、活気に溢れていた時期であった。やがて世を去る三年前になると、彼はそれまでとは違って陰気で複雑な性格を帯びるようになり、不安に苛まれ、心の不幸を鎮める麻薬として行っていた公開朗読で激しく心身を消耗させるようになった。クリスマス物語がこうした彼の精神状態を反映していると言い切ることはできない。しかし語調に変化が見られ、かつての愚かしさを好む澁刺とした筆致が失われ、暗くさらに不吉なテーマが執拗に繰り返されることになる。後半に書かれた一、二の物語が、ディケンズ自身によって公開朗読で読まれたことも、銘記すべきである。それらが読まれたのは、彼が人生と名声に漠然とした不満を感じて、そのためさらに催眠術さながら大衆の心をつかもうとして、熱に浮かされたように自ら奮い立たせていた時期だった。おそらく、こうした立体的な『クリスマス・ストーリーズ』の読み方では、確たる結論を出すことはできないであろうが、それでも読み方が深くなり、理解力がより鋭くなり、楽しみ方も増すであろう。

## 注

- 1 十三世紀頃、僧院があった場所に建てられたエセックスの牧師館で、「イングランドで最も幽霊に取り憑かれた家」として、噂の種になった。

## クリスマス・ツリー

私は今夜、ドイツのあの美しい玩具であるクリスマス・ツリーの周りに集まった楽しげな子供たちを眺めている。ツリーは大きな丸いテーブルの真ん中に置かれていて、子供たちの頭上に聳え立っていた。数知れないほどの小さなろうそくがそれを明るく照らし、華やかな飾りできらきらと輝いていた。緑の葉の奥に、ばら色の頬をした人形が隠れていて、本物の時計（少なくとも針が動き、果てしなくねじを巻くことができるものだった）が、無数の小枝から吊り下げられていた。たんぼ塗り<sup>1</sup>をしたテーブル、椅子、寝台、衣装ダンス、八日巻き時計、そして他にもさまざまな家具（ウルヴァハンプトンで作られたブリキ製の素晴らしいものだった）が、まるで妖精が家政の準備をしているかのように、大きな枝の間に飾られていた。陽気でフクロウのような平べったい顔をして、多くの普通の人間よりもはるかに快い風采をした小さな人間が飾られていた——それも当然だった。それらの頭は取れていて、身体には糖菓ボンボンが詰まっていたからである。ヴァイオリンや太鼓もあった。タンバリン、本、裁縫箱、絵の具箱、砂糖菓子入れ、覗きからくりの箱などあらゆる種類の箱があった。大人向きのどんな金や宝石類よりもはるかに光彩を放っている年長の女の子のための小間物があった。工夫を凝らした籠や針刺しがあつた。銃や刀、旗があつた。占いをするために板紙を張り合わせた魔法の輪の中に立っている魔女たちがいた。小独楽、唸り独楽、針入れ、ペン拭き、気付け瓶、挨拶カード、香水入れ、ことさら葉を金色にして眩しいばかりに見える本物の果物、贈物が詰められている模造の林檎や梨や胡桃。つまり、私の前にいる可愛らしい女の子がその子の大の仲良しである可愛らしい女の子に「何もかも揃っているわね。それ以上だわ」と囁いた通りであつた。このように不揃いで雑多に集められた品々は魔法の果物のようにツリーの上に鈴なりになっていて、四方八方からそれに向けられた明るい眼差しを照り返していた——それをうっとり眺めるダイヤモンドのように輝く幾つかの目は、テーブルの上にも届かないほどで、美しい母親や叔母や乳母の胸に抱かれておずおずと不思議そうに眺めている、切なそうな目もあつた——それらは子供時代の空想を生き生きと実感させるもので、成長する全ての木々や大地に存在する全ての事物が、あの強く記憶に残る時期にどうしてあれほどの途方もない飾りを持っているのだろうか、私は思いに耽つた。

また家に戻り、家の中で起きていているのは自分独りという状態で、私の思いはその魅力に憑かれたように、私自身の子供時代に舞い戻って行った。私がまず思ったのは、私たちが現実の生活へと昇って行くきっかけとなった私たち自身の幼年時代のクリスマスのことで、クリスマス・ツリーの枝に飾ったものの中で、私たち全ての心に最も強く残っているものは何だろう



ということだった。

取り囲む壁や低い天井によって自由な成長を抑えられることなく、ぼんやりと見えるツリーがまっすぐに伸びている。きらきらと夢幻的な光を放つツリーの天辺を見上げていると——このツリーに、下方の大地に向かって伸びているような不思議な特性が見えたからであるが——物心がつくようになって初めてのクリスマスの記憶が蘇ってくるのである。

まず、全ての玩具が見える。遠く、緑の柵と赤い実の間に、ポケットに両手を突っ込んだ軽業師がいる。彼は横になろうとはしないで、床に置かれる度にその丸々とした身体を転がし、転がったまま静止して、その突き出た目で私を睨みつけるのである——私がげらげらと笑う振りをしながらも、心の底ではいかがわしいやつだと思っていることを、彼は見透かしているのである。彼のすぐ傍にあの忌々しい臭い煙草入れがあって、その中から黒い法服を纏い、いやらしい髪をして、布で作った赤い唇を大きく開き、悪魔に取り憑かれたような弁護士が飛び出して来た。彼はぜったいに我慢のできないやつであったが、閉じ込めておくことができないのである。と言うのも、彼はまったく予期しない時に、夢に出る巨大な臭い煙草入れから、馬鹿でかい姿になって忽然と飛び出して来るからであった。遠くにいる、尻尾に靴屋が縫い糸に使う蠟をつけた蛙もまた我慢のならないやつである。どこでぴよんと跳ねるかも分からず、ろうそくの上を跳び越えて、背中に斑点——赤い斑点が緑色の肌についている——を持ったそいつが手の上にとまったりすると、もう我慢ができない。それと同じ枝に青色の絹のスカートを穿いて、ろうそく立てに寄りかかって立ち、今にも踊り出そうとしている厚紙で作られた婦人は、温和で綺麗だった。しかし、壁に吊るされて、紐で引っ張られる、もっと大きな厚紙で作られた男の方は、そうは言えない。彼の鼻には陰険な感じが漂っていて、彼が首に脚を回すと（彼はしょっちゅうそんな仕草をしていた）、実に気味悪く、二人だけになるのは、御免被りたいやつだった。

あの恐ろしい仮面が私を初めて見つめたのはいつのことだったのだろうか？ 誰がその仮面をつけていたのだろうか？ それを見て私はなぜあんなに怖がって、それが人生の忘れ得ぬ記憶として私の心に焼きついたのであろうか？ その仮面は、それ自体恐ろしい表情はしておらず、ひょうきんな感じさえ漂わせていた。ではなぜその鈍重な顔が、耐えられないほど怖かったのだろうか？ それが、被っていた人の顔を隠していたためでないことは確かである。その意味では、エプロンだって同様の恐怖を与えたであろう。できればエプロンなど誰にも着けて欲しくないのであるが、それを着けていても、仮面のようにまったく我慢ができないわけではない。仮面が無表情であったためだろうか？ 人形の顔も無表情であったが、それは怖くなかった。ひょっとしたら、人間の顔に現れてくる石のように強ばった変化が、全ての人の顔に現れてそのままそこに定着してしまう普遍的な変化を漠として感じさせ、その恐怖が、私の過敏な心をいっぱいにしたためなのだろうか？ どんな理由を考えても、私は納得できなかった。柄を回すと甲高く悲しげな音色を奏でる鼓手も、音を出さない楽団と共に箱から取り出され、硬くて伸びにくい小さな無精鉄の上に一人ひとり据え付けられる連隊の兵隊たちも、そして針金と包装用の

褐色の紙で作られていて二人の小さな子供にパイを切り分けている老婆も、長い間、私に永続的な慰めを与えてくれなかった。そして、その仮面を見せられて、それが紙でできていることが分かり、もうしまい込まれて、それを着ける人はいないと言われても、私は少しも安心できなかった。その無表情な顔を思い出すだけで、そしてそれがどこかに隠れているのだろうと思うだけで、恐怖で汗をびっしょり掻き、「ああ、やって来る！ ああ、あの仮面だ！」と叫んで夜中に目を覚ますのだった。

荷籠をつけたあの懐かしいロバ——ほら、そこにいる！——が何で作られているのか、その時はまったく気にもしなかった。その肌に触ると、本物の感触がしたのは覚えている。そして体中に丸く赤い斑点のついた、大きな黒い馬——私はそれに跨<sup>またが</sup>ることもできた——についても、それがどうしてそんな変わった状態になったのか、まったく気にしなかったし、そんな馬はニューマーケットであまり見かけないと訝<sup>いぶか</sup>ることもなかった。その馬の横に四頭の色のついていない馬がいて、チーズを積んだ荷馬車に繋がれ、またそこから離してピアノの下に入れることができた。その馬たちは尻尾と鬣<sup>たてがみ</sup>に小さなふわふわとした毛をつけていて、脚ではなく、釘で立っていたが、クリスマス・プレゼントとして家に連れて来られた時には、ちゃんと脚で立っていた。その時は何も問題はなかった。どの馬の胸にも、今のように馬具が無遠慮に釘で留められてはいなかった。音車のリンリンと鳴る仕掛けが、羽軸製の爪楊枝<sup>つまようじ</sup>と針金でできていることを私は見破った。シャツ姿で、絶えず木の柁の一方をよじ登り、別の方から真逆さまに落ちていた小さな曲芸師は少々頭が足りない——お人よしではあるが——といつも思っていた。しかしその横にある、小さな赤い四角の木材で作られていて、重なってカタカタ音を立ててくれる毎に違う絵を見せ、小さなベルによって全体が賑やかに鳴るヤコブの梯子<sup>2</sup>は実に素晴らしく、楽しいものだった。

ああ！ 人形の家！——それは私の持物ではなかったが、その家に私はよく訪れた。国会議事堂も立派だが、本物のガラス窓、本物の戸口の上り段、本物のバルコニーを備え正面が石造りになっているあの人形の家は半分ほどもいいと思わない——そうした邸宅なら湯治場で目にしたことはあるが、それは今見ても青々とした緑に蔽われている人形の家とは似ても似つかない偽物に過ぎない感じであった。その家は正面全体（それは階段という虚構を一挙に打ち消すような大きな打撃であったことを、私は認める）が一度にぱっと開くのであったが、あとは閉めるだけでよく、階段など要らないと思われた。開けると、その中にはっきりとした三つの部屋があった。優雅な調度で飾られた居間と寝室、そしてその中でも格別に素晴しかったのは台所であった。そこにはとても柔らかな炉辺鉄具、たくさんの小さな台所用具があり——ああ、あの長柄の付いたあんか！——そして横を向いたブリキの料理人がいて、いつも二匹の魚を揚げようとしていた。私はバルマク<sup>3</sup>に敬意を表して、一式の木製の皿に描かれた高尚な宴のご馳走をすっかり平らげた。それぞれのご馳走が独自の優美さを誇っていて、ハムとか七面鳥は皿の上にしっかりとくっついており、何か緑色の物が添えられていたが、私の記憶ではそれは苔のようだった！ 最近の禁酒協会が寄せ集まっても、向こうにある一式の小さな青色の陶

器によって私が嗜んでいたほどの紅茶を飲むことができたであろうか？ その陶器は実際に液体を入れることができ（私の記憶では、その液体は小さな木製の樽から流れ出ていて、マッチの臭いがした）、紅茶を至高の飲み物に変えていた。たとえ小さな役立たずの角砂糖挟みの二本の脚がパンチの手のように折り重なって砂糖が挟めなかったとしても、何ら不都合はない。一度私が毒を飲んだ子供のように悲鳴を上げ、熱湯で溶けた小さな茶匙を不注意に飲み込んだというので立派な人たちを仰天させたとしても、私は粉薬を飲まされたことは別にして、それで具合が悪くなるということにはなかったのである。

その下の、緑色の地ならしとちっぼけな園芸用の道具類のすぐ傍に、本が鈴なりのように吊り下がっているのが見えてくる。初めはそれぞれ薄い本であったが、多くの本が明るい赤と緑のすべすべした快い表紙をしていた。最初に出て来る文字は、何と太っちょで黒々としていることか！ 「A は archer (弓の射手) で蛙を狙っている」弓の射手であるのはもちろんだが、彼はまた apple-pie (林檎入りパイ) でもあり、今日の前にいる！ 彼はいつも好ましい物になって出て来る。A はそんなやつで、X を除いて彼の友達ほとんどがそうだった。X はほとんど芸がなく、Xerxes(古代ペルシャの王)とか Xantippe(ソクラテスの妻の名)くらいしか馴染になれなかった——Y も同じで、彼は常に Yacht (ヨット) とか Yew-Tree (イチイの木) で留まっていた。そして Z はいつまでも Zebra (シマウマ) とか Zany (道化) にしかなれなかった。しかし、ツリーそのものが見る見る変化し、それが豆の木になる——ジャックが巨人の家に登って行った驚くべき豆の木だ！ すると、怖くても思わず見入ってしまうあの双頭の巨人たちが、肩の上で棍棒を振りかざし、押し合いへし合いしながら、食用にするための騎士や貴婦人の髪を挿んで引きずりながら、大枝の上を大股で歩いている。そしてジャック——鋭利な刀を持ち、一瀉千里に走る靴を履いたジャックは、何と堂々としていることか！ ジャックを見つめていると、あの懐かしい思いが蘇ってくる。私は、記録に残された全ての偉業を成し遂げたのは、一人のジャックだけではなかったのではあるまいか（そんなことがあるとは思いたくないが）、あるいは最初に私が見たあの本物のあっぱれなジャック一人だけだったのだろうか、とめどなく思いに耽るのである。

クリスマスの季節にふさわしいのは赤い色のマントで、そのマントに赤頭巾ちゃん——ツリーは籠を持った彼女が通り抜ける森になる——が、あるクリスマス・イヴに私のところにやって来て、彼女の祖母を食べた後もまったく食欲が満たされず、自分の歯のことで恐ろしい冗談を飛ばした後彼女を食べる、あの姿を隠した残酷な裏切り者の狼のことを私にこっそりと教えてくれたのである。彼女は私の初恋の女性<sup>ひよ</sup>だった。もし赤頭巾ちゃんと結婚できたら、無上の幸せが得られるだろうと思っていた。しかし、そんな夢は叶えられず、なすべきことはただ、そこにあるノアの箱舟に乗っている狼を探し出して、降格すべき<sup>けもの</sup>獣としてそいつをテーブルの上に並べた行列のしんがり<sup>たらい</sup>に置くことだった。ああ、素晴らしい箱舟！ 盥に浮かべると沈んでしまった。動物たちは屋根の上でぎゅうぎゅう詰めになっていて、そこに載せるにも脚をしっかりとすぼめる必要があった——すると十中八九、彼らは針金の掛け金でいい加減に留められて

いる入口に転がり落ちて来るのだった——しかし、それで箱舟の素晴しさが変わるべくもない！象よりも一回りかふた回り小さいだけの立派なハエ、テントウムシ、それに蝶はどうだろう——全てが、技術の極致ではないか！ ガチョウはどうだろう。脚が極端に小さく、立つとバランスが取れず、いつも前のめりに転がって、創造された全ての動物たちをなぎ倒してしまう。ノアとその家族はと言えば、彼らはまるで馬鹿げた煙草詰め器のようではないか。小さな指を暖めようとして固まった豹もいれば、もっと大きな動物たちの尻尾は少しずつ擦り切れた紐のようになっていくのだった！

しっ、静かに！ ふたたび森が現れ、誰かが木の上にいる——ロビン・フッドでもヴァレンタイン<sup>4</sup>でも黄色の小人<sup>5</sup>（言うまでもなく、私は彼やマザー・バンチ<sup>6</sup>の驚異に出くわしていた）でもなく、きらきらと光る偃月刀<sup>えんげつ</sup>を持ち、ターバンを巻いた東洋の王様だ。アラアの神にかけて！ そこにいたのは二人の東洋の王様だ。もう一人が前にいる王様の肩越しにこちらを見ているではないか！ 下の草地の木の根元に、真っ黒な巨人が手足を伸ばして大の字になり、頭を婦人の膝に載せて眠っている。その傍にはきらきらと光る四つの鋼鉄の錠を掛けたガラスの箱があり、彼はその中に、起きている時の用心のため女囚を閉じ込めている。今、彼の腰帯に四つの錠が見える。婦人が木の上にいる二人の王様に合図をすると、彼らはゆっくりと降りて来る。絢爛<sup>けんらん</sup>たるアラビア夜話の幕開けだ。

ああ、有り触れた物全てが、物珍しい魅力を湛えて私に迫って来る。全てのランプが驚異に溢れ、指輪の全てが魔除けになる。上に少し砂を撒いた平凡な植木鉢は宝の山になる。樹々はアリ・ババの隠れ場所だ。分厚い肉片がダイヤモンドの谷に落とされ、宝石がその肉にくっつく<sup>く</sup>と驚がそれを銜<sup>くわ</sup>えて巣に戻る。すると、商人が大声を上げ、驚を脅して追い払うのである。タルトがバスラの大臣の息子の秘伝に従って作られる。彼はダマスカスの門に着の身着のまま置き去りにされた後、ペーストリー作りの職人に変身する<sup>7</sup>。靴直したちはすべてマスターファ<sup>8</sup>で、目隠しをされて連れて来られ、四つ裂きにされた人たちを縫い合わせている。

石に嵌め込まれている鉄の指輪を持っていけば洞窟に入ることができ、その洞窟は魔法使いと、小さな火、それに大地を揺るがす魔術をひたすら待ち受けている。輸入された全てのナツメヤシの実<sup>9</sup>は、商人がジェンニ<sup>9</sup>の见えない息子の目をその殻<sup>か</sup>で抉り出した、あの不吉な木から採れたものである。全てのオリーブは、あの新鮮な果実の——その実に関して、大主教が不正直なオリーブ商人の架空の裁判を少年が指揮するのを立ち聞きしていた——子孫である。全ての林檎は（他の二つの林檎と一緒に）サルタンの庭師が三シークインで買い取り、のっぽの黒人の奴隷が子供から盗んだ林檎の親戚である。全ての犬は、実際に人間に変身し、パン屋のカウンターに飛び乗って、その足を偽造硬貨の上に置いた、あの犬の仲間である。全ての米は悪霊であるあの恐ろしい女が、墓場で夜な夜なの晩餐に一粒ずつ啄<sup>つ</sup>ばんだのと同じ米である。私の揺り木馬——今もそこにおいて、その鼻孔を完全に見せて、血氣<sup>けき</sup>に逸<sup>は</sup>っている！——は首に釘を打ちつけてもらうべきである。そうすれば、ペルシャの王子が父親の全ての廷臣たちの見る中で、木馬に乗って飛び去ったのと同じことができるはずだ。

そう、私のクリスマス・ツリーの上方の枝の間に見える全ての物に、こうした妖精の光が見える！ 寒くて暗い冬の夜明け、ベッドで目を覚まして霜で曇る窓ガラスを通して、外でほんのりと雪が降るのが見えると、ダイナザードの声が聞こえてくる。「お姉さま、お姉さま、起きていらっしゃるなら、黒島の若い王様のお話を終わりまで話して下さい」ハーラザード<sup>10</sup>がそれに答える、「ご主人のサルタンがもう一日私を生かして下さいなら、その話をおしまいまで聞かせてあげるだけでなく、さらに面白い話をしてあげましょう」すると仁愛深いサルタンが処刑の命令を出さずに出て行き、私たち三人は、それで一息つくのである。

私のツリーの今の高さの所に、葉っぱの間にちぢこまっているもの——それは七面鳥、あるいはプディング、あるいはミンスパイ、それとも無人島のロビンソン・クルーソー、猿に取り巻かれたフィリップ・クウォール<sup>11</sup>、バーロウ氏と共にいるサンドフォードとマートン<sup>12</sup>、マザー・バンチ、さらには仮面といったものがごた混ぜになった、こうした数々の空想から生まれたものかも知れない——あるいは、想像力と菓の飲み過ぎでひどくなった消化不良から生まれたものかも知れない——から異様に恐ろしいものが見えてくる。それは曖昧模糊としていて、どうして恐怖を与えるのか分からない——しかし私には、それが恐ろしいものだと分かるのだ。形のないものが際限なく並んでいることだけは分かる。それらは玩具の兵隊をよく載せていた無精鉄がやけに巨大になった感じで、ゆっくりと私の目の前に迫って来たかと思うと、今度は限りなく遠くへと退いて行くのだった。それが眼前に迫ると、事態はさらに悪くなる。その連想から、果てしなく長い冬の夜の記憶がかすかに蘇って来るからである。ちょっとした悪戯をした罰として早々にベッドに追いやられ、二晩も眠っていたといった感じで、二時間も経たないうちに目を覚まし、二度と朝が訪れないのではないかという重苦しい気持ちと、良心の咎めのため悶々としていた記憶が。

そして今、素晴らしい小さな明りの列が巨大な緑色のカーテンの前で、地面からすいすいと浮かび上がってくるのが見える。ほら、ベルが鳴る——魔法のベルで、その音色は今でも私の耳に他のどんなベルよりも違って聞こえる——それが鳴ると、人々のざわめきや、オレンジの皮や油の芳しい香りの中で音楽が奏でられる。すぐに魔法のベルが音楽を止めさせ、大きな緑色のカーテンが荘重に巻き上がり、芝居が始まるのだ！ モンターギスの忠実な犬が、ボンディの森で惨い殺され方をした主人の復讐をする話<sup>13</sup>。赤い鼻をしてちんちくりんの帽子を被ったユーモラスな田舎者が——私は今からこの男を心の友としよう（彼は村の旅館の給仕か馬丁だったと思うが、最後に逢ってからもう長い年月が流れてしまった）——その犬の賢<sup>がじご</sup>さにはびっくらする、と言う。今後ずっと、この機知に富んだ言葉は生き生きと薄れることなく、あらゆる冗談を凌駕して私の心に最期まで残り続けるであろう。あるいは、白ずくめの服を着て、鳶色の髪を垂らし、通りで餓死する哀れなジェイン・ショー<sup>14</sup>のことを知って涙にくれ、そしてジョージ・バーンウェル<sup>15</sup>が悪辣きわまりない叔父を殺して、その後それを心から悔いて叔父を許してやるべきだったと思ったことを知ったのである。私を楽しませるために速やかに現れて来たのがパントマイムの役者——驚嘆すべき天才！——である。道化たちが火薬を込めた臼

砲からきらきらと星のように輝くシャンデリアに向かって打ち出される。すると、純金の鱗で全身を被ったハーレクウィンが、珍奇な魚よろしく身体を振ると、鱗がきらきらと光る。パンタローネ<sup>16</sup>（心の中で私の祖父と比べても非礼にはならないと思う）が灼熱した火かき棒をポケットに入れて、「そら、お偉いさんのお出ました！」と叫び、「おい、お前がやるのを見たぜ」と言って軽窃盗罪で道化を責める。それから全ての物が易々と別のどんな形にも変えられる。そして、「お頭<sup>つら</sup>で考えなきゃ、何もできん」と言う。私は、ここでまた、侘しい思いをした最初の経験——後になってもしばしばそこに戻るのであるが——翌日、退屈な決まりきった世界に戻ることができず、私が離れてしまった輝かしい雰囲気の中にいつまでも生き続けることができず、天空の床屋の看板柱のような杖を持った小妖精に思い焦がれるとか、彼女と共に妖精の不死の世界に憩いたいと憧れることもできないのである。ああ、私がクリスマス・ツリーの下の方の枝に目をさまよわせると、彼女はさまざまな形を取って戻って来て、その度に去って行き、けっして私の傍に留まることはしないのだ！

この喜び浸っていると、小さな劇場が突然姿を現す——ほら、そこに見える、見慣れた舞台と棧敷席の羽飾りを着けた貴婦人たち！——そして、あとはただ、水彩絵具で彩色して衣装を纏わせた「粉屋とその一味」<sup>17</sup>、そして「エリザベス、もしくはシベリア追放者」<sup>18</sup>を、糊や<sup>にかわ</sup>膠やゴム糊で舞台にくっつけば済む。絶えず付きまとう少々の事故や失敗（特に、立派なケルマー<sup>19</sup>や他の人物たちが理不尽にも、芝居が佳境に入った時に体を二つに折り曲げてしまうのである）にもかかわらず、この溢れるほどの空想の世界は心呼び覚まし、多くのものを含んでいるので、その空想を宿す私のクリスマス・ツリーの遥か下に、昼間の暗く薄汚れた本物の劇場が見える。それらはきわめて珍しい瑞々しい花輪のようにこうした連想で飾られていて、今なお私を魅了するのである。

しかし、聞くがいい！ 聖歌隊が歌っている。その歌声が私の子供らしい眠りを破る！ 聖歌がクリスマス・ツリーに飾られるのを見て、私はその歌からどんなイメージを連想するだろうか？ それらは他の何よりも前から知っていて、他の何よりも遠くにありながら、私の小さなベッドに寄り集まって来る。牧場で集まった羊飼いたちに話しかける天使。夜空を見上げ、星に導かれる旅人たち。飼葉桶で眠る幼子。広々とした宮の中で教師たちに語りかける子供。穏やかで美しい顔をした厳かな人が、死んだ少女の手を取って起こす。また町の門の近くで棺に入れられたやもめの息子を蘇らせたこと。夥しい数の人たちがその人の座っている部屋の屋根の瓦をはいで覗き込み、床に載せたままロープで病人をその人の前に吊り下ろしたこと。その人が嵐の中、舟に向かって海の上を歩いたこと。さらに岸边に立って、多くの群集に教を説いている姿。そして他の子供たちに取りまかれて、幼子を膝の上に載せていたこと。さらに盲人に視力を、言葉を失った人に話す力を、耳の聞こえない人に聴力を、病人に健康を、脚の悪い人に歩く力を、無知な人に知識を回復させたこと。さらに、武器を持った兵士に監視され、全地は暗くなり、大地が揺れる中、十字架につけられたその人の姿。ただ一つ、「彼らをお許し下さい。彼らは何をしているか分からずにいるのです」<sup>20</sup>という声が聞こえる。

さらに、クリスマス・ツリーの低いところであって、より成長した枝の上にクリスマスの連想がぎっしりと集まっている。教科書は閉じられ、オウィディウス<sup>21</sup>やウェルギリウス<sup>22</sup>は沈黙させられる。冷たく無礼な質問をする三の法則<sup>23</sup>はずっと前に、不要なものとして除かれている。削り取られたり、刻み目をつけられたり、インクが染みついたりしている全ての机と長椅子がごちゃごちゃに置かれている舞台上、テレンティウス<sup>24</sup>やプラウトゥス<sup>25</sup>が活躍することもない。クリケットのバット、柱、球が、踏みならされた芝生の香りと、夕暮れの空にやわらかく響く歓声と共に、ツリーのさらに高い部分に残っている。たとえ私がクリスマスの季節に二度と家に戻ることがなくなっても、この世が続く限り、少年や少女がそこに居続けるであろうし（実に喜ばしいことだ！）、そこに戻って来るのだ！ 向こうの私のツリーの上で、彼らは、（神の祝福があらんことを）楽しく踊ったり戯れたりしている。そして私の心も一緒に踊り、戯れるのだ！

そして私はクリスマスになるとわが家に戻る。私たち全てがそうするし、そうすべきなのである。私たちは皆、短い休暇——長ければ長いほどいいのだが——で、石板を使って果てしなく算数の勉強していた大きな寄宿舎から、休息を取るためにわが家に戻るし、戻って来るべきなのである。その気があっても行けないし、その気になっても訪ねることのなかった場所があるが、クリスマス・ツリーによる空想の扉はそこでも開かれるのだ！

空想の翼は私を冬景色へと誘う。木々には冬の情趣が溢れている！ 低い霧に霞む地面から霧の垂れ込める湿地を通して、星の光を遮るほどこんもりと茂る植え込みの間の、洞窟さながらにうねうねと続く暗く長い丘を上り、やがて広々とした頂上に出る。そして突然の静寂に包まれ、並木道で立ち止まる。門扉の呼び鈴を引くと、凍てつくような寒気の中で、深く荘厳とも言える音が響き渡る。扉が蝶番で開き、大きな屋敷に向かって馬車で近づいて行くと、窓にちらちらと光っている明りが少しずつ大きくなり、目の前に現れる並木が私たちを通すために両側に厳かに退くように思われる。一日中、時間を問わず、怯えた野兎が雪に覆われた芝生の上を走り抜け、鹿の群れが霜の凍りついた硬い地面を遠くで踏み鳴らす音が聞こえてくる。それがまた辺りの静寂を破るのである。もし見ることができれば、羊歯の奥に隠れたその鹿たちの目が、木の葉についた露の雫のようにきらきらと光っていることだろう。しかし鹿たちはじっとして動かない。全てが静寂に包まれている。そして、窓の灯りははとんとん大きくなり、樹々は私たちの背後に退き、もう後戻りさせないといった感じで再び閉じると、私たちは屋敷の前に来ている。

おそらく、炒った栗や他にも楽しく快いことがいつも私たちを待ち受けている。皆でクリスマスの暖炉を囲み、冬の夜話——幽霊の話、あるいはもっと怖い話——をして楽しむからである。私たちは、動くとならばただ暖炉に少し身を寄せるだけで、まんじりともしないで話に聞き入るのだ。しかし、それはたいしたことではない。私たちは屋敷に着く。それは古い屋敷で、炉の上の薪を載せる古めかしい台の上で薪が燃えている大きな煙突がいっぱい付いていて、檜材の壁板に掛けられた厳しい肖像画（その幾つかにはまた厳しい題名がついている）が、疑い

深そうに顔をしかめている。私たちは中年の貴族で、その屋敷の主人や女主人、それに客たちと共に贅沢な食事を取る——クリスマスの季節で、古色蒼然とした屋敷は客でいっぱいである——食事が済むと、私たちは寝室に向かう。私たちの部屋は実に古めかしく、綴織が掛かっている。暖炉の上に掛かっている緑色の服を着た騎士の肖像はどうも虫が好かない。天井には大きな黒々とした梁が渡されていて、大きな黒々とした二体の彫像が脚を支えている大きな黒々とした寝台がある。その彫像は、私たちに特別の便宜を図るため、庭園にある古めかしく広大な教会の二つの墓石を離れてやって来たように見える。しかし、私たちは御幣を担ぐ貴族ではないので、そんなことは気にしない。はてさて！ 私たちは召使いを下がらせ、扉に鍵を掛けて部屋着に着替えて暖炉の前に座り、種々の思いに耽る。やがて床に入る。はてさて！ 私たちは眠ることができない。寝返りを打ったり、寝台から転げ落ちたりするが、どうにも眠れない。炉の残り火が発作的に燃え、その度に部屋に幽霊が出るような気がする。私たちは掛け布団から顔を出し、二つの彫像や緑色の衣装を着けた騎士の肖像——あの険悪な顔をした騎士——を見る。ちらちらとした灯りの中で、それらは近寄ったり退いたりするように思われる。私たちは迷信深い貴族ではないが、それらが実に薄気味悪く思われるのである。はてさて！ 私たちは神経が高ぶってくる——ますます不安になってくる。私たちは口に出して言う、「実に馬鹿げている。しかし我慢ができない。気分が悪い振りをして、誰かを叩き起こそう」はてさて！ 私たちがまさにとしようとしたとき、鍵を掛けた扉がすーっと開いて、長い金髪を垂らし、死人のような青ざめた顔をした若い女性が入って来て音もなく暖炉に近寄り、それまで私たちが座っていた椅子に腰を下ろして両手を揉み絞っている。その時、私たちは彼女の服が濡れているのに気づく。口蓋に舌がくっついて声が出ないが、仔細に彼女を観察する。彼女の服は濡れている。彼女の長い髪は泥で汚れている。彼女は二百年前の服装をしていて、ベルトに錆びた鍵の束を付けている。はてさて！ 彼女は座ったままで、私たちは気を失うことさえできず、ただ茫然と眺めるだけである。やがて彼女は立ち上がり、錆びた鍵で部屋の全ての錠を開けようとするが、一つとして合う鍵はない。それから彼女は緑色の騎士の肖像画にじっと目を注いで、低く恐ろしい声で言う、「鹿が知っている！」そう言うと彼女は再び両手を揉み絞り、ベッドの傍を通過して戸口から出て行く。私たちは急いで部屋着に着替え、ピストルを手にして（旅にはいつもピストルを携行している）、その後を追うが、扉には錠が掛かっている。私たちは鍵で扉を開け、暗い廊下を見渡すが、そこには誰もいない。私たちは当て所なく歩き回って召使いを探そうとするが、見つからない。私たちは夜が明けるまで廊下を行きつ戻りつする。それから空けていた部屋に戻って眠りに落ち、召使い（何があっても動じない男だ）と明るい日光によって起こされる。はてさて！ 私たちは惨めな朝食を取る。そして居合わせた人たち誰もが、私たちの具合がおかしいと言う。朝食後、私たちは家の主人と屋敷を調べ、彼を緑色の騎士のところに連れて行く。そして全てが明らかになる。その騎士は、その家族に仕えていた若い家政婦で評判の美人であった女性を弄び、彼女は池に身を投じて、長い年月が経ってやっと発見されたのであるが、それは鹿が池の水を飲もうとしなかったからであった。それ以来、



彼女が真夜中にその屋敷に出入りし（と言っても、特に緑色の騎士がよく眠っていた部屋であるが）、錆びた鍵で錠を開けようとする、と密かに囁かれているのである。はてさて！ 私たちが目にしたことを主人に話すと、彼は顔を曇らせ、誰にもそのことは口外しないで欲しいと言う。そして、その秘密は守られる。しかし、全ては真実なのである。私たちは死ぬ前に（もうこの世にはいないが）多くの信頼できる人たちに、そのことを話してしまったのである。

この古い屋敷について話せばきりが無い。音が響き渡る廊下、来客用の陰気な寝室、長年の間閉じられている幽霊の出そうな翼部があって、私たちは背中にぞくぞくとする快感を覚えながらぶらつき、いくらでも幽霊に遭遇することができるのである。しかし、（一言するだけのことはあると思うが）それらの幽霊はきわめて数少ない一般的な類型や種類に当てはめることが可能なのである。と言うのも、幽霊には独創性がなく、通い慣れた場所に「出没する」だけだからである。それ故、ある悪辣な貴族、准男爵、騎士、あるいは紳士がピストルで自殺を図った、ある古びた邸宅の、ある部屋には、どうしても血を拭い取ることのできない、ある床板が残っている。現在の所有者がしたように床を何度も何度も擦ったり、彼の父がしたように何度も何度も鉋で削ったり、彼の祖父がしたように何度も何度もごしごし洗ったり、あるいは曾祖父がしたように強力な酸で何度も何度も腐食させたりしても、血は——濃くも薄くもならず——多くも少なくもならず——相変わらず同じ状態でそこに付着したまま残っている。そして、こうした古びた別の屋敷には開いたまま閉まらなかったり、けっして閉じておくことができなったりする幽霊に取り憑かれた扉があり、あるいは、糸車の気味悪い音、槌の音、足音、叫び声、溜息、馬の蹄の音、じゃらじゃらと鳴る鎖の音がしたりする。そうでなかったら、真夜中に家族の主人が息を引き取ろうとする矢先、塔時計が十三の時を打ったり、そうした時刻にいつも誰かが目撃している幻のような黒い馬車が既に付属した庭の大きな門の近くでじっと誰かを待っていたりする。あるいはこんなこともある。メアリ婦人がスコットランドの高地地方にある広壮で荒涼とした屋敷を訪れ、長旅で疲れていたのも早めに床に就き、翌朝、朝食の席で無邪気に言った、「おかしいですわね、昨晚、あんな遅い時刻にこんな辺鄙な場所でパーティがあったのに、私が寝る前に誰もそのことを言ってくれないなんて」すると皆が、どういことですか？と聞いた。メアリ婦人が答えた、「あら、一晩中、私の部屋の窓の下で、馬車がテラスの砂利道を何度もぐるぐる回っていましたよ！」それを聞くと、屋敷の主人は真蒼になり、彼の妻も蒼ざめた。マクドゥードルのチャールズ・マクドゥードルが、それ以上言わないようにメアリ婦人に合図し、誰もが押し黙っていた。朝食後、チャールズ・マクドゥードルが、この家族には言い伝えがあって、砂利道で馬車の音がすると、それが死の前兆だと思われているのです、とメアリ婦人に話した。その言い伝えは現実のものとなった。と言うのは、その二ヵ月後に、屋敷の女主人が亡くなったからである。宮廷の侍女をしていたメアリ婦人はこの話をしばしばシャーロット老王妃に話していた。さらに王妃が老国王にこの話を伝えると、陛下はいつも「えっ、えっ？ 何だって、何だって？ 幽霊かね、幽霊かね？ まさか、まさかそんなことが！」と言って、寝るまで同じことを繰り返されていた。

あるいは、私たちのほとんどが知っているある人物の友人で、彼が大学で学んでいた青年であった頃、彼は特に親しい友人と約束を交わしていた。その約束というのは、肉体から離れた靈魂が再びこの世に戻ることが可能なら、二人のうち最初に亡くなった方がもう一人のもとに現れることにしよう、というものだった。そのうち、私たちの友人はその約束を忘れていた。人生を歩む中で、二人の若者は大きく分かれた道を辿ることになった。しかし長い年月が経ったある夜、私たちの友人はイングランドの北部にいて、その晩ヨークシャーの荒野にある旅館に泊り、たまたまベッドから外を眺めた。すると、月明かりの中で、窓際の書き物机に寄りかかり、大学時代の旧友がじっと彼を見つめていた！その幻に厳肅な思いで話しかけると、それは小さくはあるが良く聞こえる声で答えた、「僕に近寄らないでくれ。僕はこの世の者ではない。約束を果たすためにやって来た。僕はあの世から来たんだ。でもその世界のことは話せない！」そう言うと、全身が薄れて行き、まるで月光の中に溶け込むように消え去ったのである。

あるいは、私たちの近所では有名な、エリザベス朝様式の美しい邸宅を最初に借りた借家人の娘がいた。彼女のことを聞いたことはあるでしょう？ ない、とおっしゃる！ おやまあ、美しく十七歳になったばかりの彼女が、ある夏の黄昏に、花を摘むため庭に出たが、すぐに怯えて玄関に駆け戻り、父親に言った、「ああ、お父様、庭で私自身に逢ったの！」彼は娘を抱いて、気のせいだよ、と言った。しかし彼女は言った、「ああ、本当なの！ 私は広い道で私自身に逢い、私が青ざめた顔をして、萎れた花を摘んでいたの。そしてその私が振り向いて、摘んだ花を差し上げたの！」そしてその夜、彼女は他界した。それから彼女の話が絵に描かれるようになり、けっして仕上げられてはいないが、顔を壁に向けた姿が、現在も屋敷のどこかに見られると言われている。

あるいは、私の弟の妻の叔父がある穏やかな夕暮れ時に、馬に乗って帰路に就いていた。その時、彼の家のすぐ傍の草でおおわれた小道に一人の男を見た。男は彼の目の前にいて、狭い道の真ん中に立っていた。「マントを着たあの男は、どうしてあそこに立っているんだろう？」と彼は考えた。「馬車に轆かかれたいのだろうか？」その姿は動く気配を見せなかった。彼はその姿がじっと動かないのを見て、不思議な感覚に襲われたが、馬の歩調を緩め、そのまま進んで行った。鐙がそれにほとんど触れそうになるまで近づくと、馬が後ずさりし、その姿はこの世のものとは思えない妙な仕草——後ろ向きで、足も使わないようだった——で、土手をすうっと上り、そのまま消えてしまった。私の弟の妻の叔父は、「こりゃ驚いた。ボンベイから来た俺の従兄弟ではないか！」と叫んで、急に汗をびしょりとかいていた馬に拍車をかけ、従兄弟の妙な振舞いを不思議に思いながら、勢いよく家の正面に回った。そこで彼は、一階に向けて開いている客間の高いフランス窓を通り抜けようとしている同じ姿を見た。彼は手綱を召使いに放り投げ、急いでその後を追った。中に入ると、彼の妹が一人で座っていた。「アリス、従兄弟のハリィは？」「従兄弟のハリィって、ジョンのこと？」「そうだ。ボンベイから来た。私はたった今、小道で彼に逢い、すぐ前にここに入るのを見たんだ」誰一人、人影を見たものはいなかった。そしてまったく同じその時刻に、後で分かったことであるが、この従兄弟はインド

で亡くなっていたのである。

あるいは、九十九歳で亡くなり、最期まで心的能力を失わなかったある賢明な老婦人がいて、彼女は実際に「孤児」を見たのであった。しばしば根も葉もない話が伝わっているが、真実は以下に述べる通りである——その話は、実際のところ、私たちの家族にまつわるもので——彼女は私たち家族の縁戚だったからである。彼女が四十歳くらいで、まだ見目麗しかった頃（彼女の恋人が若くして亡くなり、そのため、その後数々の求婚を受けたにもかかわらず、彼女はけっして結婚しようとしなかった）、インドの貿易商をしていた兄が新たに購入したケントの屋敷を訪ね、そこに滞在することにした。この屋敷はかつて幼い少年の後見人に管理を委託されていた。その人物は次の相続人になる男で、少年に残酷な虐待を加えて、彼を殺してしまった。彼女はその家にそんな過去があるとは、まったく知らなかった。彼女の寝室には、後見人が少年をよく閉じ込めていた檻おびがあったと言われている。実際にはそんなものではなく、あったのはただの小室だった。彼女はその寝室で眠り、夜中に急を告げるようなこともなく、朝になると、部屋に入ってきた女中に落ち着いて言った、「一晩中、寂しそうで可愛らしい顔をした男の子があの小室から覗いていたけど、あれは誰なの？」女中は答える代わりに大きな悲鳴を上げ、すぐに屋敷から逃げ出した。彼女は驚いたが、とても気丈な女性だったので、着替えをして階下に下り、そのことを兄にこっそりと話した。「ねえ、ウォルター」と彼女が言った、「一晩中、寂しそうで可愛らしい顔をした男の子に悩まされたの。その子は寝室の小室からずっと覗いていて、その小室は開けようとしても開かないの。何か悪戯があるのよ」「悪戯ではないと思う、シャーロット」と彼が言った、「この屋敷には言い伝えがあって、お前が見たのは孤児なんだ。その子は何をしていたのかね？」「扉をそっと開けて」と彼女は答えた、「部屋の中を覗いていたわ。時々、一、二歩部屋に入って来たので、私はその子を励ますように呼びかけると、彼は怯えて尻込みをし、また小室にそっと入って、扉を閉めるの」「小室からは行き来できないようになっているんだよ、シャーロット」と兄が言った、「屋敷のどこともね。釘で留められて開かないようになっているんだ」まったくその通りだった。二人の大工が、午後いっぱいかけてやっと扉を開け、中を調べることができた。その時、彼女は孤児を見たことを確信した。しかし、この話の突飛で恐ろしいところは、幼くして亡くなった彼女の兄の三人の息子たちに次々とその姿を見ていたということだった。それぞれの子供たちが十二時間前に具合が悪くなり、顔をほてらせて戻って来て、こう言ったのである。ああ、お母さん、僕は野原に行って、そこにある櫛くしの木の下で奇妙な少年と遊んだんだよ——寂しそうな可愛らしい顔をした子で、とてもおずおずとしていて、いろいろな合図をするんだ！ 子供の死につながったこの体験から、両親はその子があの「孤児」で、その孤児が小さな遊び相手として選んだ子供の命が、それで終わったのだと知ったのである。

レギオンというのはドイツの城の名で、私たちはそこでぼつんと座って幽霊の出るのを待つのである——私たちは、私たちが歓待するために比較的快適にされたある部屋に招き入れられる——その部屋で、私たちはぱちぱち音を立てて燃える暖炉の火が、のっぺりとした壁に投げ

かけるさまざまな影に目をやる——暖炉にたつぷりと薪をくべ、小さな食卓に冷たい雄鶏の焼肉、パン、葡萄、そしてライン産の熟成したワインを入れた瓶といったご馳走を並べた後で、その村の旅館の亭主とその美しい娘が下がると、私たちはとても寂しい気分になる——二人が次々と部屋を抜ける度に、陰鬱な雷鳴の轟きのように、閉まる扉が反響する——深夜になると、私たちはさまざまな薄気味悪い神秘に出逢う。レギオンというのは、幽霊に取り憑かれたドイツの学生の名である。私たちが彼と共に暖炉にさらに近寄ると、隅に居るその学生は目をまん丸く見開き、風に吹かれて扉が開くと、腰掛けていた足台から急に姿を消す。私たちのクリスマス・ツリーには、夥しい数の果物がきらきらと輝き、ツリーのほとんど最上部まで鈴なりになっていて、下の大枝の方まで熟している。

ツリーに飾られているその後の玩具や空想の中で——しばしば生気がなく、純粹さも失せているが——かつて夜中に安らぎを与えてくれた、あの楽しい昔の聖歌隊と結びつく連想がいつまでも続きますように！ クリスマスの時節の社交的な思いに取り巻かれてはいても、いつまでも子供時代の優しい心でいられますように！ この時節がもたらす全ての楽しい心象や連想の中で、<sup>しづ</sup>賤が家の上に留まった明るい星が全てのキリスト教徒の星になりますように！ 一瞬全ての想像が停止する。ツリーが薄れて行く。低い部分の枝は私にはまだ暗くてよく見えない。もう一度見てみよう！ お前の枝には何も飾られていない部分がある。そこにはかつて私が愛した目があって、きらきらと光って微笑んでいたのに、そこから去って行ったのだ。しかしその遙か上方に、死んだ娘と<sup>やもめ</sup>寡婦の息子を甦らせた人の姿が見える。神は善なり！ お前の下方に成長する隠れた部分に私の老齢が潜んでいても、私が白くなった頭で、子供らしい心、そして子供らしい信仰と信頼をそのお姿に向け続けることができますように！

今、ツリーは明るい笑いと歌声、そして陽気な踊りで飾られている。それらは歓迎すべきものである。それらが、暗い影の見えないクリスマス・ツリーの枝の下で、これからもずっとその無邪気な姿でいられますように！ しかし、ツリーが地面に沈んで行くにつれ、葉の間から囁くような声が聞こえる。「これは、愛、親切、慈悲、哀れみの記念である。これは『私』を記念するものである！」

## 注

- 1 ラッカー、ワニスなどの透明塗料で、木部の仕上げ塗りをする方法。
- 2 ヤコブが夢に見た天に届く梯子で、天使たちがそれを上り下りしているのが見られたという。（「創世記」第二十八章、十二節）
- 3 バルマルク家の人（王子）。「アラビア夜話」に登場する権勢と富を有していたバグダッドの貴族。乞食を宴に呼んだが、次々に出される皿はすべて空で、身振りや手振りでもてなしたという。
- 4 「ヴァレンタインとオーソン」。フランスの古いロマンスで、十六世紀に英語に翻訳されて子供たちに愛されるようになった。オーリアン近くの森で生まれたペピン王の妹の双子にまつわる話で、オーソンは熊に連れ去られ

で野蛮な人間になり、ヴァレンタインは王によって宮廷で育てられ騎士になる。

5. フランスの女流作家コーンテス・ドゥ・リュドールスタット（一六五〇～一七〇五）の童話で、一七二一年、英語に翻訳された。高慢な美しい王女と醜く悪辣な黄色い小人の話で、小人が王女に結婚を申し込むが、やがて二人とも棕櫚の木に変えられる。
6. エリザベス朝時代に、いつも物語をして人を楽しませていたという、ロンドンの有名な居酒屋の女主人。十七・十八世紀には、マザー・パンチの名を付した小話集がよく読まれていた。
7. 『アラビア夜話』の「大臣ヌーレディーヌとその兄シャムセディーヌとハサン・パドレディーヌの物語」  
兄弟のヌーレディーヌとシャムセディーヌはカイロの大臣をしていて、自分たちの娘と息子を結婚させる約束をするが、喧嘩別れをして弟は流離の旅に出る。やがて二人は同じ日に結婚してヌーレディーヌはハサン・パドレディーヌという息子を、そしてシャムセディーヌはセット・エル・ホスンという娘を同じ日に出産する。父親が帝王（サルタン）の勘気を被ったため絶世の美女であるセット・エル・ホスは小人で醜悪なせむしの馬丁と結婚させようとするが、ジェンニ（魔神）とジェンニヤ（魔と女）がそれを不憫に思って、帝王の勘気に触れて身の危険が迫りバスラを逃れて父親の墓の上で眠っていた比類なく美しいハサンをカイロまで運び、二人を結婚させる。しかし魔神たちは夜が明けるまでに、ハサンが眠っていたバスラまで彼を連れ戻さなければならず、彼を運んでいるうちにジェンニがジェンニヤに淫蕩な思いを抱いたためアラアが流星でジェンニを焼き殺し、そのためジェンニヤはそれ以上進むことができず、セット・エル・ホスンと初夜を過ごして下着を着けていないハサンをダマスカスの城門に置き去りにした。ハサンは町の人たちから狂人扱いをされるが、親切な菓子屋に拾われてその養子になり、そこで十二年近く働くが、その後妻と彼のいない間に生まれた子供のもとに連れ戻される。
8. アリ・ババの弟カシムが四十人の盗賊に四つ裂きにされた後、その四つの肢体を縫い合わせた靴直し。
9. [イスラム伝説] 人間に対して時には益を、時には害を与える妖霊で、人や獣の姿に変身できる。
10. 『アラビア夜話』の語り手。同衾した処女を殺すと言われているシャリヤール王と結婚し、王の凶手を逃れるために妹のダイナザードを呼んで口裏をあわせ、妹が王に頼んで、姉に毎夜面白い話をするようにさせる。シャラザードの話が王の好奇心をそそり、彼女が佳境に入ったところで話を中断したため、その続きを聞きたい王は処刑の命令を延ばし、彼女は王の魔手を逃れた。
11. 『ロビンソン・クルーソー』を真似て書かれた『世捨て人』（一七二七年）に登場する主人公。
12. 『サンドフォードとマーティンの物語』トマス・デイ（一七四八～八九）による少年の読み物で、一七八三年から八九年にかけて最初に出版された。田舎の牧師である金言好きのバーロウ氏が、教訓めいた物語をしてハリー・サンドフォードとトミィ・マーティンに道徳を教えるという内容である。
13. 十四世紀頃、オーブリ・ドゥ・モンティディディエールという人物が、フランスのモンタージスの町の近くにあるボンディの森で殺されたが、彼の飼っていた犬が殺人犯のマケールを追いつめ、その激しい攻撃に怯えた犯人が罪を自白したという。『モンタージスの犬』の話は、ルネイ・シャルル・ピークセイレイクール（一七七三～一八四四）によって翻案され、一八一四年ロンドンで最初に出版された。
14. (?一四四五～?一五二七)。金細工師ウィリアム・ショーの妻で、エドワード四世の愛妾。後に魔術の疑いでリチャード三世に投獄され、窮死した。
15. イギリスの劇作家ジョージ・リロウ（一六九三～一七三九）の作『ロンドンの商人、ジョージ・バーンウェルの物語』に登場する人物。

16. パントマイムで細いズボンを穿いた痩せこけた老いぼれ役。前述のハーレクウィンはその下男で、コロンバインの恋人としてさまざまな滑稽を演じる。
17. 劇作家アイザック・ポコック（一七八二～一八三五）の通俗劇。最初に出版されたのは一八一三年。長年に亘って玩具の劇場で子供たちが楽しむ劇として人気を博した。女性の主人公がボヘミアの盗賊（首領のケルマーは謹直な粉屋を装っている）によって水車小屋に閉じ込められるが、主人公の恋人が盗賊の一味に潜入して彼女を救出し、水車小屋を爆破する。
18. メアリ・コットンが子供のために「事実に基づいて」書いたとされる劇作（一八一〇年）で、玩具の劇場のために脚色された。
19. 上述の「粉屋とその一味」の主役で、粉屋を装う盗賊段の首領。
20. 「ルカによる福音書」第二十三章三十四節、他参照。
21. ローマの詩人（B.C.四三～A.D.一七）。アウグストゥス帝（ローマ初代皇帝）によって追放され、その追放先で没した。『愛の技巧』、ギリシャ神話と伝説を扱って有名な『変身譚』などがある。
22. ローマの詩人（B.C.三十～十九）。アウグストゥス帝の宮廷詩人となったが、旅先で熱病のため没した。農事を詠い、労働を讃えた『牧歌』や『農耕歌』などがあり、その抒情と田園描写の美しさは比類のないものである。
23. 第一項と第四項（外項）の積は、第二項と第三項（内項）の積に等しいという法則。
24. ローマの喜劇詩人（B.C.一九〇？～一五九）。彼の作品は十六世紀のイギリスにおける創始期の喜劇の見本とされただけでなく、コングリーヴやR.B.シェリダンなどにも影響を及ぼした。
25. ローマの喜劇詩人（B.C.二五四～一八四）。彼の作品はギリシャ新喜劇の影響が著しく、その巧みな性格描写及びヒューマナーによって広く愛読され、特にイギリスではルネッサンスの時期に、正当喜劇の手本と考えられた。

## 時の変化とクリスマス

クリスマスの時節が魔法の輪のように私たちの限られた世界を包み、私たちが欲しくて求め続けていたものをすべて充たし、家庭の喜び、愛情、そして希望を全て結び合わせ、クリスマスの暖炉の火の周りに全ての物や人を集わせ、私たちのきらきらと輝く幼い目に映る小さな像を完璧なものにしてくれた、そうした時期をほとんどの人が経験したことであろう。

私たちの種種の思いがその狭い境界を超え、私たちの幸せを充たしてくれていた人（生前はとても愛しく、とても美しく、何一つ欠点のない人）の姿が見られなくなり、私たちもまたこれまで誰かが座っていたクリスマスの炉辺に座れなくなり（そう思うだけかもしれないが、その方がずっといい）、私たちが誰かの名前にあらゆる花輪や花飾りをまとわせるといった時が、おそらくは夙にやってくるのである。

それは、夏の雨が降った後、私たちから長く延びる淡い色をした虹の縁にかすかに見える明

るい幻のようなクリスマスの時節だった！ それは、希望を持ちながらもけっして叶えられることはなかった事物に至福の喜びを覚えた時節だった。それでもそうした事物は私たちの揺らぐことのない心に強く存在し続けていて、その後それらが少しでも実現したことによって、それがどんなに強く現実味を帯びるようになったか、今ではとても言い尽くせない！

おや！ 私たちと私たちが初々しい気持ちで選んだあのかけがえのない女性<sup>ひと</sup>が、私たちのことで以前はいがみ合っていた両家によって夢想だにしなかった結婚の幸せを与えられたとき、そうしたクリスマスが訪れなかったと言われるのですか？ 私たちが両家の縁を取り持つ前には、それまでよそよそしくしていた義理の兄弟姉妹たちにちやほやされ、またその父母たちが頻繁に私たちの家を訪ねて、私たちを閉口させたことがなかったと？ その時にクリスマス・ディナーが本当になかったと言えるのでしょうか？ そのディナーの後、私たちは食事の席から立ち上がって、同席しているそれまでの恋敵に広い心になって心からの敬意を表し、それまでの事は水に流してその場で友情を交わし、ギリシャやローマの神話を遙かに超える永遠の愛情の絆を結ばなかったのでしょうか？ 当の恋敵が私たちの最愛の女性のことをとうの昔に諦めて金目当てに他の女性と結婚し、高利の金貸しになってしまったのでしょうか？ とりわけ、時を経た今、私たちがその女性と結婚しながらもその女性の心を倦み疲れさせていたら、おそらく惨めな気持ちになり、独り身でいた方が良かったのではないかと、ほんとうに思ったりするのでしょうか？

私たちが赫々<sup>きつかく</sup>とした名声を得たばかりのあのクリスマス——私たちは何か立派で有益なことを為したということで意気揚々とどこかに招待され、私たちが名誉ある輝かしい名声を賜って家に戻ると、家族が歓喜の涙で迎えてくれたクリスマス——そんなクリスマスをまだ経験していないと言われるのですか？

私たちが人生の道を歩みながら、その時々にかような素晴らしい生誕日のような大切な標石に出くわしても、せいぜい立ち止まるようなことしかしないで、かつて存在し消え去ってしまったか、あるいはかつて存在し今も存在している事物を自然にそして心を含めて厳粛に回想するように、実在しなかった事物を振り返って見ることをするのでしょうか？ もしそうであるなら、またそのように思われるが、人生は夢よりも少しましなだけで、愛や努力を注ぐに値しないという結論を下すことにならないのでしょうか？

とんでもない！ 読者の皆さん、私たちはクリスマスにそうした誤った考えを抱くことは断じてありません！ 進んで役立ちたいと願う心、忍耐、人間としての責任を快く果たすこと、そして親切、寛容といったクリスマスの精神がますます私たちの心に深く感じられますように！ 特に最後に挙げた美德に込められているものは、私たちが若い頃に見て果たされることのなかった夢によって強くされ、強くされるべきだということなのです。そうした夢が、この世で実体のない無価値なものに対してさえも心を含めて接することを教えてくれる教師であることに、誰が異論を差し挟めるでしょう！

それ故、私たちが歳をとるにつれて、私たちのクリスマスの連想やそれらがもたらしてくれ

る教訓の輪がさらに広がって行くことに、もっと感謝しようではないか！ それらの一つ一つを喜んで迎え入れ、クリスマスの炉辺にその居場所を与えようではないか。

幼い頃の切望、熱い空想から生まれた輝かしい創造物を<sup>ひいらぎ</sup> 柵に隠れたあなたの家に喜んで迎えよう！ 私たちはあなたを知っているが、まだまだあなたの教えを受けなくてはいけない。たとえ<sup>はかな</sup> 儚く消えたものであれ、幼い頃の計画や愛を、あなたのいる部屋の片隅——私たちの周りでより堅実に燃える灯りに照らされている——に喜んで迎えよう。かつて私たちの心に存在した全てのものを喜んで迎えよう。そしてあなたを熱い思いで受け入れたことを天に感謝しよう！ 私たちは今でもクリスマスに夢の城を築いている。花のような子供たちの間で飛び交う蝶々のようにひらひらと飛ぶ私たちの思いこそ、その証人なのだ！ この幼い少年の前に、私たちが幼い頃に空想したものよりもずっと明るく、それも名誉と現実性を持った未来が広がっている。ふさふさとした明るい色の巻き毛の周りに、時がまだ初恋の女性の巻き毛を刈る鎌を持たなかった時のように、神の恩寵が快く、そして軽やかに戯れている。その傍にいるもう一人の少女の顔——もっと穏やかで晴れ晴れとした輝きのある——その穏やかで満ち足りた可愛らしい顔に、「家庭」と言う文字がはっきりと描かれているのが見える。星の輝きのようにその言葉から光が発し、私たちは、私たちの墓が古びて、私たちのものとは違う新たな若々しい希望が生まれ、私たちの心とは別の心が感動し、別の道がなだらかにされ、新たな幸せが花開き、咲き誇り、朽ちて行くのが見えるのである——いや、朽ちるのではない。まだ存在していないし、これから何世代も存在することのない別の家族や子供たちの群れがやがて生まれ、花開き、咲き誇る——それが世の終わりまで続くからだ！

全てを喜んで迎え入れよう！ これまで存在していたこと、けっして存在しなかったこと、そして存在して欲しいこと全てを、柵に隠れて広い心で誰をも受け入れて下さるあなたのクリスマスの炉辺の周りに、喜んで迎え入れよう！ 向こうの影になった場所に、炎の上にとっそりと突き出ている敵の顔が見えないであろうか？ クリスマスという良き日に免じて、私たちは敵を許すのだ！ 私たちに害を加えた人物をクリスマスの交わりに加えることができるなら、彼を呼んで共に楽しんでもらおうではないか。不幸にもそれができなければ、これからけっして彼を傷つけたり責めたりすることはしないと彼に請合って、その場を去ってもらえばよい。

この日に、私たちは何一つ締め出すことはしない！

「ちょっと待て」と低い声が聞こえる。「何一つ？ よく考えてみろ！」

「クリスマスの日、私たちは炉辺から、『何一つ』締め出すことはしない」

「枯葉がうず高く積もっている広漠とした<sup>みやこ</sup> 都の影も？」と声が答える、「地球を蔽って暗くする影も？ 死の都の影も？」

それさえも締め出すことはしない。一年のうちの特にこのクリスマスの日、私たちは顔をその都に向け、その都に住む声なき群衆の中から愛すべき人たちを私たちの群れに加えるのだ。死の都よ、私たちがその名のもとで心を寄せ合うクリスマスに、そして約束によって今私たちと共にいます厳かな存在のもとに、私たちは大切な人たちを受け入れ、退けるようなことはし



ない！

そうなのだ。私たちは炉辺の傍にいる現実の子供たちの間に実に厳かに、優雅に舞い降りて来る小さな天使たちの姿を見ることができ、その天使たちが私たちのもとを去って行ったことを冷静に考えることができる。族長たちと同じように、高貴な人とは気づかないままもてなしをする陽気な子供たちは、彼らの客がどんな人たちかは知らない<sup>1</sup>。しかし、私たちには彼らの姿が見えるのだ——まるで子供を連れ去ろうとするかのように、お気に入りの子供の首に、一人の天使がその光り輝く腕を巻きつけているのが見える。その神聖な姿をした子供たちの中に、この世では肉体的に欠陥のあった哀れな少年で現在は神々しい姿に変わった一人の少年がいる。この世を去ろうとしていたその少年の母親が、彼をこの世に独り残して死ぬことがとても辛いと言う。少年が自分のもとに来るまでには、おそらく長い年月を待たなければならないからである——その子はまだ幼なかったからである。しかし、その子はすぐに母親のもとに行き、彼女の胸に抱かれ、彼女は手を取って、彼を導くのである。

勇敢な少年がいて、彼は遠い国の、燃える太陽に熱せられた灼熱の砂漠で行き倒れた時に言った、「僕がもう一度お国の人たちに最後の愛を込めて接吻したかったこと、僕が満足して死に赴き、僕の務めを果たしたことを伝えて下さい！」あるいは別の少年がいて、その頭上には「それゆえ、私たちは彼の亡骸を海神の懷に抱かせる」という言葉が読み取れる。そして船は彼の遺体を寂寞とした海に葬り、航海を続けたのである。あるいは、鬱蒼とした森の樹陰で疲れきって休息し、この世で二度と目を覚まさなかった少年がいる。砂漠や海や森から、彼らがこの時節に我が家に戻ることがないであろうか？

愛らしい少女がいる—美しい娘になるはずだった——しかしそれが叶わなかった少女である——彼女はクリスマスの喜びに浸る家族を悲しませ、当て所なく沈黙の都に向かったのである。私たちは彼女が疲れきり、聞き取ることのできないような弱々しい声で何かを呟き、疲労のため最期の眠りに就いたのをよく覚えている。ああ、今の彼女の姿を見るがいい！ああ、彼女の美しさ、晴れやかな面立ち、常に変わらぬ初々しさ、そして彼女の幸せな姿を見るがいい！会堂司のヤイロの娘は死から甦った<sup>2</sup>。しかし、さらに喜ばしいことに、彼女は同じ声が「子よ、起きなさい」という声を聞いたのである。

私たちには幼いころから仲の良かった友達がいた。私たちはその友達と共に私たちの人生に訪れる変化についてしばしば心に描き、老齢になった時にどんな口のきき方をし、どんな風に歩いたり考えたりするだろうかとか、どんな話をするだろうかとか楽しく想像したものである。彼は若い盛りに死の都の定められた住まいに移ってしまった。彼のことをクリスマスの記憶から消し去ってもいいのだろうか？彼の愛はそのように私たちを拒んだであろうか？失った友人、失った子供、失った両親、姉妹、兄弟、夫、妻を私たちは見捨てることはしない！私たちのクリスマスの心の中に、私たちのクリスマスの炉辺に、いつまでもあなた方が懐かしむ場所が残されている。絶えることのない希望の中で、そして不滅の愛が誕生した日に、私たちは「何一つ」締め出すようなことはしない！

冬の太陽が町や村に沈んで行く。海には茜<sup>あかね</sup>色の道が延び、さながら聖なる者が海面に新たな足跡を残しているようだ。それからすぐに太陽が沈み、夜の帳<sup>とぼり</sup>が下り、きらきりと光る明かりが見え始める。不揃いに広がる町の向こうの山腹や、村の尖塔を取り巻く静かな木立の中にある墓石に、さまざまな記憶が刻まれている。その墓石は、繁茂する雑草の中に咲く野花の中に置かれていて、多くの土塁の周りに咲くつましい茨が巻きついている。町や村では、家々が悪天候に備えて扉や窓を閉じていて、うず高く積まれた薪が燃え、嬉しそうな顔、そして音楽のように快い声が聞こえる。家庭の守護神を祀る祭壇から全ての無作法や害悪が除かれますように！ そして、辛い記憶も優しい励ましの心で受け入れられますように！ それは、その時節とそれが与えてくれる人の心を和ませ、全ての穏やかな安らぎの記憶であり、この世においてさえ生けるものと死せる者を再会させ、多くの人はずたずたに引き裂こうとしても引き裂けなかった寛大な愛と善行の歴史の記憶なのである。

## 注

- 1 「ヘブル人への手紙」第十三章、二節参照。
- 2 「ルカ伝」第八章四十節～五十六節参照。

## 貧しい親戚の話

彼は、クリスマスの炉辺を囲んで家族の立派な人たちがたくさん座っておられるのに、その人たちを差し置いて、自分が皆の話の口火を切ることをととても嫌がっていた。そして彼は、「もしわが敬愛する主人のジョン」（彼は、主人の健康を祝って乾杯しましょう、と言った）から話を始めていただければ、その方が妥当ではないかと提案した。私は人の先に立つのが不慣れなので、できれば——、と彼は言いかけた。しかし、皆が口を挟み、あなたから始めなさい、大丈夫です、できます、できるでしょう、すべきですといっせいに声を上げたため、彼は手を揉むのをやめて、肘掛け椅子の下から脚を出して、話を始めた。

これから私の打ち明け話をお聞きになって（と貧しい親戚が言った）、ここに集まられた家族の人たち、特にわが敬愛する主人——今日の持て成しに私たちは深く恩義を覚えています——は、きっと驚かれることでしょう。しかし、家族の中で私ごときしがいない者が話すことに少しでも驚きを感じていただけるのでしたら、私としてはすべて嘘偽りなく正確にお話しするしかありません。

私は人が想像しているような男ではありません。それとはまったく違う人間です。話を進め

る前に、私がどんな男だと思われているか、ざっと話しておいた方がいいでしょう。

私の思い違いでなければ、私は——もし私が間違っていたら、ここにお集まりの家族のどなたかにそれを正していただきたいと思います。大いにあり得ることですから（ここで貧しい親戚は、異存はありませんかと言った風に周りを穏やかに見回した）。私は人が善くて自分が損をするだけの人間であると思われています。私が何かにつけてこれといった成功をしたことがなく、経営の才がなく騙されやすい——私の共同経営者の利己的な企みに他愛なく引き込まれ——愚かなほど信じやすく——クリスティアーナが私を裏切ることなど夢にも思っておらず——愛にも挫折し、世事に関してはどうしてもずる賢くなれなかったため、叔父のチルから遺産を相続できず、人生を通して何かにつけて人に騙され失望を味わっていて、現在の私が五十九から六十歳になる独り身の男で、四半期毎に手当てによる限られた収入で暮らしている、そんな風に私は思われています。ですが、わが敬愛するジョンが、もうそんな話は結構と言っておられるようです。

私の現在の暮らし方を世間がどう思っているか、これからお話します。

私はクラップム・ロードの下宿屋——とても立派な家の、とても清潔な裏部屋です——に住んでいますが、気分が優れない時以外は、家にいることはなく、いつも仕事に出かける振りをして朝の九時に家を出ます。朝食——バターつきのロールパンと半ポイントのコーヒー——は、ウェストミンスター橋付近の老舗しにまのコーヒー店で取ります。それからシティに行き——自分でもなぜ行くのか分かりませんが——ギャラウェイのコーヒー店や取引所で腰を据えたり、歩き回って私が訪ねても悪い顔はしない親戚や知人のいる事務所や会計事務所を覗き、寒い日にはそこで火にあたらせてもらったりします。こうして五時まで過ごし、それから夕食を取ります。だいたいそれに一シリング三ペンスを使います。さらに夜の楽しみに使えるだけのお金も少しばかり持っていますので、帰る途中で老舗のコーヒー店に立ち寄って紅茶を飲んだり、時にはトーストを食べたりします。そして、時計の長針が回り回って再び午前おこに辿り着くと、私も回り回ってクラップム・ロードに辿り着き、宿に戻ってすぐ眠りに就きます——火を熾すにはお金がかかるし、それで面倒が起きたり、部屋が汚れたりするといって家族から反対されているからです。

時には、親戚や知人の一人が親切にも私を食事に招待してくれることもあります。そうした日は私にとっては特別なもので、私はお祭り気分になり、たいていセント・ジェームズ・パークを歩きます。私は孤独な男で、誰かと一緒に歩くようなことはめったにありません。私がみずぼらしいために、敬遠されるということではありません。私はちっともみずぼらしくはないのです。黒色の立派なスーツ（あるいは、黒い色合いのオックスフォード織り<sup>1</sup>の、ずっと持ちのいい服）をいつも身につけているからです。しかし、私はもそもそと話す癖があり、寡黙で、活気がなく、相手にするには魅力のない男だと自分でもよく分かっています。

ただ、こうした通則に当てはまらないのが、従兄の子供である幼いフランクです。私はその子に特別の愛着を持っていますし、その子も私にとっても懐なついています。彼ははにかみ屋で、言

うなれば、人混みに出るとたちまち踏み躪<sup>はぶ</sup>られ、そのまま忘れ去られてしまうような少年です。しかし、彼と私はいたって馬が合うのです。私は、その哀れな少年がいずれ家族の中で私と同じ道を辿るのではないか、そんな気がしています。話をするにはほとんどありませんが、それでも私たちは互いに心が通じ合っているのです。私たちは手を取り合って、いろいろな場所を歩き、それほど話はしなくても、お互いの気持ちが分かるのです。彼がまだとても幼かった頃、私はよく玩具屋の飾り窓の所に彼を連れて行き、店内の玩具を見せてやっていました。彼は、驚いたことに、多くの素晴らしい贈物を彼に買ってやりたいのに、それができない私の苦衷を、すぐに察していました。

幼いフランクと私は大火記念円塔<sup>2</sup>の外部——彼はその円塔が大の気に入りののです——や、テムズ川に架かる橋、ただで見られる名所ならどこにも見物に出かけます。私の誕生日に二度ほど、私たちはアラモードビーフ<sup>3</sup>を食べ、半額で入れる芝居見物に出かけ、それに打ち興じました。ロンバート・ストリートには大金持ちが住んでいると私がよく話していたことから、私たちはその通りによく出かけていました——彼はロンバート・ストリートが大好きなのです。ある日、その通りを歩いていたとき、紳士が通りすがりに私に言いました、「もしもし、あなたのお子さんが手袋を落としましたよ」つまらないことを言って恐縮ですが、あなたのお子さんと言われたことで、私は感極まり、愚かにも目に涙が浮かびました。

幼いフランクが地方の学校に遣られると、私は自分がどうしてよいか途方に暮れるだろうと思いますが、ひと月に一度そこまで歩いて行き、半休日に彼に逢うつもりです。その日には、彼がヒースの野原で遊ぶと聞いているからです。子供の心を乱すと言って私の訪問に反対されるなら、彼に見られないようにして遠くから彼の姿を眺め、また歩いて帰ることにします。彼の母親は上流の家柄の出で、私たちがしょっちゅう一緒にいることを面白く思っていないのです。私は彼の引っ込み思案な性格を良くするような男ではないと分かっていますが、まったく逢えなくなったら、彼の心に一時的な寂しさ以上の打撃を与えるのではないかと思うのです。

私がクラップム・ストリートでこの世を去る時には、どうせ大したものには遺せないでしょう。しかし、私の手許には、襟のひだ飾りが胸のところまで波打つように開いているシャツを着た、明るい顔をした巻き毛の少年（私の母が私のために描いてくれたものですが、とても私に似ているとは思えません）の細密肖像画があります。売ほどの値打ちはありませんが、それをフランクに与えてもらえればと願っています。私はその肖像画にささやかな手紙を添え、その中で、私がこの世に留まる理由はないと言わざるを得ないけれども、愛しい少年との今生<sup>こんじょう</sup>での別れに私が後ろ髪を引かれる思いであることを認<sup>しん</sup>めています。私は、人が善くて自分が損をするだけの善人であるという私の生き方を他山の石とするように、私なりの助言を手短に書き加えています。そして、私がこの世を去っても、私が自分以外の誰にも取るに足りない存在であったこと、そして人が犇<sup>ひしめ</sup>くこの大きな世界でなかなか居場所を見つけられなかった自分はそこから去る方がいいのだと書いて、彼が抱くであろう別離の悲しみを和らげることにしています。

以上が(貧しい親戚はそう言って咳払いをし、少し大きな声で話を始めた)、私について皆が抱いている印象です。さて、聞いて驚かれるでしょうが、私の話の究極の目的は、その印象がすべて間違っていることを知っていただくことなのです。私の人生や気質は、これまで話したものと違っています。私はクラップム・ロードにも住んでいません。どちらかと言えば、そこにはあまり行くことはありません。私は、たいいてい——その場所を言うと、いかにも気取っていると思われるでしょうから、口に出すのが何だか気恥ずかしいのですが——お城で暮らしています。それは古い豪壮な住まいという意味ではなく、誰もが城という呼び名で思い浮かべる建物です。その中に、私は自分の経歴の委細をそのまま残しています。これからそれを話します、

ジョン・スパター(私の会社の事務員でした)を初めて共同経営者にしたのがその頃で、私はまだ二十五歳そこそこで、かなりの遺産を譲ってくれるはずの叔父のチルの家に住んでいて、クリスティーナに思い切って結婚を申し込みました。私はその前からずっとクリスティーナを愛していました。彼女はとても美しく、魅力に溢れていました。私は、寡婦である彼女の母親が欲得ずくの女で腹黒い心を持っているのではないかと、彼女に対して少し不信感を抱いていましたが、クリスティーナのために、できる限り母親を悪く思わないように努めました。私はクリスティーナ以外の女性を愛したことはありません。幼い頃から、クリスティーナは私にとってこの世の全て、いや、この世の全てをはるかに超える存在でした。

クリスティーナは母親の同意によって私の求婚を受け入れ、私は天にも上る心地でした。叔父のチルの家での生活は儉約を強いられる退屈なもので、私の屋根裏の部屋はどこか北部の要塞の上にある監禁部屋さながら、侘しく、殺風景で、寒々としていました。しかし、クリスティーナの愛がある限り、私はこの世で何も求めませんでした。私は、どんな人とも自分の運命を取り替える気持ちはありませんでした。

不幸なことに、貪欲という悪徳が叔父のチルの心を支配していました。金持ちであるにもかかわらず、彼は吝嗇で、欲深い、阿漕な老人で、惨めな暮らしをしていました。クリスティーナには財産がなかったので、私はしばらく彼女との婚約を彼に打ち明けるのを躊躇っていました。しかし、私はついに、結婚を決めたという内容の手紙を書き、ある晩、寝る前にその手紙を彼に手渡しました。

翌朝、私は十二月の冷気に震えながら下階に下りて行きました。叔父の暖房のない家は、外の通りより寒々としていました。通りでは時折り冬の陽が射し、ともかく、通り過ぎる元気な顔や声が活気を添えることもあるからです。私は重苦しい心を引きずりながら、叔父が座っている長くて、天井の低い朝食室に向かいました。それは暖炉の火がちょろちょろと燃えている大きな部屋で、大きな張り出し窓には、まるで宿無しの人の涙のように、夜中に降った雨の跡がついていました。その窓は、敷石がひび割れ、所々で錆びた鉄柵が抜け落ちている冷え冷えとした中庭を見張っているようで、そこから、かつて解剖室であった(屋敷を抵当に入れて叔父から金を借りた立派な外科医が住んでいた時のことです)醜悪な離れ屋が、逆に張り出し窓

を睨んでいるようでした。

私たちはいつも朝が早いので、冬になると、ろうそくの明かりで朝食を取っていました。私が朝食室に入ると、叔父は寒さで縮こまり、一本のぼんやりと光るろうそくの向こうの椅子に身体を丸めていましたので、私は食卓の傍に行くまで彼の姿が見えませんでした。

私が手を差し出しますと、彼は杖を掴み（彼は身体が弱っていたので、いつも杖をついて家の周りを歩いていました）、それで私を一撃し、「馬鹿めが！」と言いました。

「叔父さん」と私は言い返しました、「そんなに怒られるとは思いませんでした」確かに頑固で怒りっぽい老人でしたが、彼がほんとうに怒るとは思わなかったのです。

「思わなかった！」と彼は言いました、「じゃ、思ったんだな？ わしが許すとても思っていたのか、卑しい犬めが！」

「お言葉が過ぎますよ、叔父さん！」

「言葉が過ぎる？ お前のような馬鹿者にはまだ丁寧すぎるくらいだ」と彼が言いました。

「おい！ ベッツィ・シャープ！ この男をみろ！」

ベッツィ・シャープというのは、しわくちゃで、人相の悪い、黄ばんだ肌をした老婆—私たちの唯一の奉公人でした—で、朝のその時間にはいつも叔父の脚を擦こすっていました。私を見るように彼女に命じたとき、叔父はその骨と皮だけの手で傍に跪ひざまっている彼女の頭の天辺を掴み、その顔を私に向けました。外科医が住んでいた時にはもっとそんな感じがしたと思いますが、この二人と解剖室との連想が、心配で気を揉んでいる最中、私の心をふと過よぎりました。

「このめそめそした腰抜けを見るがいい！」と叔父が言いました、「この意気地なしを見ろ！ こいつは、いわゆる人が善くて損ばかりする男ってわけだ。誰にも否いやとは言えない男だ。仕事で大いに成果を上げたと言って、先頃、生意気にも共同経営者を迎えた男だ。一文の持参金のない女と結婚しようとする男だ。わしが死ぬのを虎視眈々と狙っているイゼベル<sup>4</sup>のような邪悪な女の罠にかかった男だ！」

私は、その時、叔父の怒りが尋常ではないことが分かりました。われを忘れるほど怒りでもしなければ、そんな酷い言葉が口をついて出るはずはなかったからです。死について彼は激しい嫌悪感を抱いていましたので、彼の前でそうした言葉を口にするとか灰ほめかすことはぜったいできなかったのです。

「わしが死ぬ」と彼はその言葉に対する嫌悪感に挑むことによって私に挑みかかるように繰り返しました、「わしが死ぬ—死ぬ—わしが死ぬと吐ぬかすのか！ そんな思惑など蹴散らしてやる。わしの家で最後の飯めしを食って、それを喉につまらせてくたばるがいい！」

ご推察されるでしょうが、そんな悪態を吐かれて朝食を取る気にはなれませんでした。私はいつもの席に就きました。私は叔父に勘当されたことが分かりました。それでも私は、クリスティアーナの愛を頼りにじっと我慢してその場を耐えました。

彼はいつものように盆に置かれたパンと牛乳を平らげましたが、座っている食卓から自分の椅子を離して膝の上にそれを置いて食べていました。食べ終わると、彼は念を入れてろうそく

を消し、寒々とした灰色の陰気な朝の明りが部屋に忍び込んできました。

「さて、マイケル」と彼は言いました、「別れる前に、お前のいるところでその婦人たちに一こと言っておきたいことがある」

「お好きになさって下さい」と私は答えました。「でも、この結婚に純粹で、無私の、誠実な愛以外の気持ちがあるとお考えなら、それは大変な誤解で、私たちの心を踏み躪られることになります」

それに対して彼は「嘘つきめが！」と言っただけで、あとは何も言いませんでした。

私たちは雪と雨が囊みづれになって降る中を、クリスティーナとその母親が住んでいる家へと向かいました。叔父は彼女たちをよく知っていました。彼女たちは朝食の席に就いていて、そんな早朝に私たちが訪れたことに驚いていました。

「お早う、奥さん」と叔父が母親に言いました、「私が訪ねた理由わけは、お分かりでしょう」どうやら、この家に純粹で、無私の、誠実な愛が閉じ込められているようですな。その愛を完全なものにするために、それが必要とする全てのものを持参できて、嬉しく思っております。あんたの義理の息子を連れて来ました、奥さん——それに、あんたの夫をな、お嬢さん。こちらの方は、私とは赤の他人ですが、賢明な取引が成就したことは、慶賀の至りです」

彼は家を出る時に唸り声で私を威嚇いかくし、それっきり彼の姿を見ることはありませんでした。

私の大切なクリスティーナが（貧しい親戚が話を続けた）母親によって籠絡ろうらくされて金持ちの男と結婚し、境遇が変化した現在、彼女が乗った馬車が私の傍を通る時に、車輪についた泥が私に跳ねかかる、といった話はまったく間違っています。いや、そんなことはありませんでした。彼女は私と結婚したのです。

思っていたよりも早く私たちが結婚に至ったのは、次のような経緯いきまつからでした。私は粗末な下宿屋に住んで、彼女のためにお金を貯め、先のことをあれこれ考えていました。そんな生活を送っていたある日のこと、彼女は真剣に私に話しかけて、こう言ったのです、

「ねえ、マイケル、私は心からあなたを愛しています。私はあなたを愛していることを打ち明け、あなたの妻になると誓いました。まだ結婚は整ってはいませんが、私はそうした気持ちを互いに交わした日から、善きにつけ悪きにつけどんな変化があろうとも、あなたの妻であることに変わりありません。私はあなたのことをよく知っています。もし私たちが離れ離れになって結婚が実らなければ、あなたの人生はすっかり暗くなり、そして、あなたは今でも強い性格を發揮して世間と闘いっておられますが、それでも暗い現実を前にして心が屈してしまうことはないでしょうか」

「ああ、クリスティーナ！」と私は言いました。「まったくその通りです」

「マイケル」と、彼女は私に手を握らせたまま、慎ましく優しい愛情を込めて言いました、「もう離れて暮らすことはやめましょう。ただ私が言えるのは、私があなたの収入で満足して暮らすことができ、それであなたが幸せになれるのではないかということです。私は心からそう思っています。もう一人で苦しまないで下さい。二人で苦勞を分かち合いましょう。愛しい

マイケル、あなたが夢にも思ってもいない私の秘密を、しかも常に私につきまとっている悩みを、あなたに話しておいた方がいいと思います。母親のことです——母は、あなたが失ったもの、あなたが私の誠意を信じて私のために失ったものをまったく思いやることをしないで、富に執着し、私に別の縁談をしきりに勧めるのです。私はそれがとても辛く、とても我慢ができません。それを我慢するということは、あなたに対する誠意を裏切ることになるからです。私は離れて見ているよりも、あなたと苦勞を共にしたいのです。あなたが与えて下さる家庭に勝るものはありません。私が完全にあなたのものになれば、あなたはさらに強い勇氣を得て現実の苦勞を乗り越えられると思います。ですから、そうしましょう」

その日、私は無上の幸せを味わい、新しい世界が目の前に開けてきました。私たちはその後すぐに結婚し、妻を連れて私たちの幸せな住いに向かいました。私が言った城というのがその住いで、私たちはそこで暮らし始めたのです。それ以来、私たちはその城にずっと住み続けています。子供たちもすべてその城で生まれました。最初に生まれた子は——今では結婚していますが——可愛い女の子で、私たちはその子をクリスティアーナと名づけました。彼女の息子は幼いフランクそっくりで、私には二人の区別がつかないほどです。

共同経営者と私の関係について世間が抱いている今の印象も、まったく間違っています。叔父と私があんな形で喧嘩別れをしたとき、彼は私を救いようのない愚か者だと言って、最初から冷たくあしらうことはありませんでしたし、その後も徐々に事業の独り占めを謀って私を追い出すようなこともしませんでした。それどころか、私に対して、きわめて誠実に、礼儀正しく接してくれました。

私たちの間に起こった事情をこれから話します——叔父と喧嘩別れをした日、会計事務所に私のトランク（私が家を出た後、叔父が運送料を払わずにそれを送ってきたのです）が届く前に、私たちの小さな埠頭に構えた、川が見渡せる部屋に下りて行き、それまでの経緯をジョン・スパターに話しました。ジョンはそれに答えて、老いた金持ちの老人こそ手に取れる現実で、愛とか感傷といったものは一文の得にもならない戯事だ、などとは言いませんでした。彼はこう話しかけたのです——

「マイケル」とジョンが言いました、「僕たちは学校が一緒で、僕はたいてい君よりもうまく事を運ぶコツを心得ていて、君よりも評判が良かった」

「その通りだよ、ジョン」と私は答えました。

「とは言っても」とジョンが言いました、「僕は君の本を借りて、それらを失くしてしまった。君から小銭を借りて、それを返したことがなかった。ナイフが壊れて、僕が与えた代金よりも高い値で君に新しいナイフを買わせてしまった。僕が窓を壊したのに、君がそれを壊したと言わせてしまった」

「みな取るに足りないことだよ、ジョン・スパター」と私は言いました、「そんな事があったのも確かだが」



「君がよちよち歩きの事業を始めて、それに大成功が見込まれるようになったとき」とジョンが続けました、「僕はどんな仕事にでも就きたいと思って君を訪ね、君は僕を事務員にしてくれた」

「それも取るに足りないことだよ、ジョン」と私は言いました、「そんなことも確かにあったけれど」

「僕に商才があって、この事業に僕が実際に役立つと分かったとき、君は僕をそれまでの地位に留めておくことはしないで、当たり前のように君の共同経営者にしてくれた」

「それも、君が記憶している他の些細な事柄と同じように、取るに足りないことだよ、ジョン・スパター」と私は言いました、「僕は、君の長所と僕の欠点を承知していたし、今でも承知してるんだから」

「それでね、君」とジョンは、学校でよくしていたように、私の腕を抱えて言いました。私たちの会計事務所の窓——それは船尾の窓のような形をしていました——の外では、流れに乗って二隻の船が川下に向かって軽やかに下っていました。その情景は、ジョンと私が信頼し合って共に人生の航路を航行しているようでした。「こうして君とは仲良くやっているが、互いをきちんと理解しておくことも大切だ。君は人が善すぎるよ、マイケル。君は人が善すぎて自分だけが損をするようなところがある。僕が肩を疎めたり、首を振ったり、溜息をついたりして、君を傷つけるような態度を見せたり、君が僕に寄せる信頼をさらに裏切るようなことをするとしたら——」

「でも、君はそんなことはちっともしていない、ジョン」と私は言いました。

「ちっとも！」と彼が言いました、「しかし、仮定の話として聞いてもらいたい——いいかい、もし僕が二人でやっている仕事を完全に君から隠したり、また時には別の仕事を明らかにしたり、さらに君に対して曖昧なまゝにして別の仕事を進めたりして、さらに君を裏切るようなことをすれば、僕はますます強さを発揮し、君は日に日に弱い立場に置かれるようになり、やがては僕が成功への王道を歩み、君は何マイルもその道から離れた荒地に取り残されることになってしまうだろう」

「まさに凶星だ」と私は言いました。

「そうならないようにするために、マイケル」とジョン・スパターが言いました、「あるいは、そんなことが万が一にも起きないように、僕たちは腹藏なく話し合わなければならない。僕たちの間で隠し立てがあってはいけないし、互いに共通の関心を持たなければならない」

「ジョン・スパター」と私はきっぱりと言いました、「それこそ僕の言わんとするところだ」

「君には人に左右されやすいところがあるので」とジョンは友情で顔を熱らせながら言いました、「他の誰かがその弱点に付け込もうとしたら、僕がその楯になることをぜひ許して欲しい。僕が君の弱点をうまくあしらおうとしていると考えられては困るのだが——」

「ジョン・スパター」と私は彼の言葉を遮って言いました、「そんなことは夢にも思っていないよ。僕は自分の弱点を正して欲しいのだ」

「僕だって、そうだ」とジョン・スパターが言いました。

「まさにその通り！」と私は叫びました、「僕たちは同じ目的を抱いていて、立派にそれを追求し、互いを心から信じ合っている。僕たちの目的は、事業を順調に発展させるために協力することなんだから」

「その通りだ！」とジョン・スパターが答えました。そして私たちは心を込めて握手をしました。

私は私の城である家にジョンを連れて戻り、とても楽しい一日を過ごしました。私たちの共同経営は順風満帆<sup>まんぱん</sup>でした。私の共同経営者であり友人でもあるジョンは、私が思っていた通り、私に欠けているものを補ってくれました。そして、彼は事業と私自身を向上させてくれ、私が彼を助けて彼を少しでも成功させることができると、十分な感謝をもってそれに報いてくれました。

私は（と貧しい親戚は、手をゆっくりと擦<sup>こす</sup>り合わせ、暖炉の火を見つめながら言った）金持ちではありません。そんな気はなかったからです。でも、そこそこの金は持っていて、並みの欠乏や心配事があっても何ら不自由なく暮らすことができます。私の城は豪華なものではありませんが、とても住み心地が良く、温かみがあって楽しい雰囲気があり、まさに「家庭」を絵に描いた感じです。

母親と生き写しの私たちの長女は、ジョン・スパターの長子と結婚しました。両家族は愛情という別な絆で緊密に結ばれました。夕方はとても楽しい時刻で、私たちは共に集い——度々のことでした——ジョンと私は昔のことや、私たちがいつも心に抱いてきた共通の関心について語り合うのでした。

城に住んでいる私には、寂しさというものを知りません。私たちの子供や孫の誰かが常に周りにいて、私の家族の若々しい声を聞くのは、嬉しいことです——ああ、それは言葉に尽くせないほどの嬉しさです！ 常に変わらず誠実で、愛情に溢れ、甲斐甲斐しく、皆を支え、慰めとなっている誰よりも大切に献身的な私の妻は、私の家の尊い恵みであり、彼女から他のあらゆる恵みが広がっていくのです。私たちは音楽好きの家族で、いつのクリスマスでも、私が少し疲れて元気を失っていると、彼女はピアノにそっと近寄って、私たちが最初に婚約した時に彼女がよく歌っていた優しい曲を歌ってくれるのでした。私はとても気弱で、誰か他の人がその曲を歌うのを聞くと、とても耐えられなくなってしまうのです。かつて、幼いフランクと一緒に劇場で演奏されたその曲を聞いたとき、その子はいぶかしげに言いました、「マイケル、僕の手の上に涙が落ちたけど、この熱い涙は誰が流したの？」

以上話したことが私の城であり、またその中に私の実際の人生の跡が残っています。私はしばしば幼いフランクをその城に連れて行きます。彼は私の孫たちに歓迎され、一緒に遊んでいます。一年のこの時節——クリスマスと新年の時節ですが——私はめったに城から出ることはありません。この時節の連想が私をその城に留めるような気がします。そしてこの時節の教え

が、そこに留まることがいいと私に教えてくれるように思われるのです。

「そして、その城は——」と一同の中から落ち着いた優しい声があった。

「そうです。私の城は」と貧しい親戚はなおも暖炉の火を見つめ、首を振りながら言った、「空中にあります。わが敬愛する主人であるジョンがその事情を正確に示唆しています。私の城は空中にあります！ 私の話は終わりです。この話は、どうかお忘れになって下さい！」

## 注

- 1 比較的厚地の柔軟な光沢のある織物。ワイシャツ、婦人服地などに用いる。
- 2 1666年のロンドンの大火を記念して建立されたもので、1671から77年にかけて有名な建築家サー・クリストファー・レンによって火元近くに建立された。高さが616mある。
- 3 小玉の玉葱や人参などの野菜と一緒に赤ぶどう酒などで蒸し煮したビーフ。
- 4 北王国イスラエルの王アハブの邪悪な妻。（『列王記下』 第九章三十～三七節）

## 子供の話

ある時、ずいぶん昔のことであるが、ある人物が旅に出かけた。それは不思議な旅で、始めた時にはとても長い旅に思えたが、中途まで来ると、とても短いものに思われた。

彼はほんの少しの間、誰にも逢わずほの暗い小道を歩いてしたが、やがて綺麗な子供に回り逢った。彼はその子供に尋ねた、「ここで何をしているの？」すると子供が言った、「僕はいつも遊んでいるんだ。さあ、一緒に僕と遊ぼうよ！」

そう誘われて、彼は一日中その子と遊び、一緒に陽気に戯れた。青く澄みわたった空、<sup>きんきん</sup>燦々と輝く太陽、きらきらと光る川面、緑したたる木の葉、美しく咲き匂う花々、鳴き鳥の快い<sup>きんきん</sup>囀り、ひらひらと舞う蝶々、目や耳に入る全てが甘美な趣<sup>きんきん</sup>を湛えていた。それは天気の良い時だったが、雨が降ると、二人は地に注ぐ雨粒を嬉しそうに眺めたり、雨が止んだ時に漂ってくる新鮮な草花の香りを嗅いだりしていた。風が吹くと、その音に耳を澄ませ、その風が生まれた場所——それはどこなんだろう、と彼らは不思議に思った——からヒューヒューと唸り声を上げて吹き募り、雲が吹き流され、木々が折り曲がり、煙突がガタガタと鳴り、家が揺れ、海が怒濤に逆巻くと、風が何を言っているのだろう、と楽しい空想を巡らせていた。しかし、雪が降ると、それは何よりも素晴しかった。雪片が無数の白い鳥の胸の綿毛のようにしきりに舞い落ちるのを眺めたり、それが柔かに降り積もって大きな吹き溜まりになるのを見たり、小道や道を包む静寂に耳を澄ませたりするのが何よりも面白かったからである。彼らは飛び切り素晴らしいたくさんの玩具や、目を見張らせるような絵本を持っていた。<sup>きんきん</sup>偃月刀、先の尖った靴、ターバン、小人や巨人、魔神や精霊、青髭や豆の木や金持ち、洞窟や森、そしてヴァレンタインとオ

ーソンなど、何もかもが新しく、全てが本物であった。

しかし、ある日のこと、旅人は子供を見失った。彼は何度も何度も子供の名前を読んだが、返事はなかった。彼はまた旅を続け、しばらくは誰にも出逢うことなく歩いてしたが、やがて美しい少年に出くわした。彼は少年に言った、「ここで何をしているの？」すると少年が答えた、「僕はいつも勉強しているんだ。さあ、一緒に勉強しようよ」

そこで彼は、ジュピター<sup>1</sup>やジュノー<sup>2</sup>、古代ギリシャやローマの歴史、何やかやについて私にはわけの分からないことを数知れないほど学んだ——ひょっとしたら旅人もそうだったかも知れない。と言うのも、彼はすぐに学んだことの大半を忘れてしまったからである。しかし、彼らはいつも勉強していたわけではなかった。夏には川でボートを漕ぎ、冬には凍った水の上でスケートを楽しみ、あちこちを歩いたり馬に乗ったりして動き回った。クリケットやあらゆる球技に打ち興じた。陣取り合戦、鬼ごっこ、大将ごっこなど、私には考えられないほど多くの遊戯を楽しみ、誰だって彼らの右に出る者はいなかった。彼らは休暇も取り、十二夜の祝いの菓子<sup>3</sup>を食べ、パーティを開いて深夜まで踊り、本物の劇場で純金・純銀の宮殿が大地から聳え立つのを眺め、世界の驚異を一挙に見たりしていた。彼らの友達は彼らをととても愛していて、その数を数える<sup>いとも</sup> 遠がないほどだった。彼らは皆とても幼く、彼と同じように美しい少年ばかりで、一生を通して心を通い合わせ続けるのではないかと思われた。

しかし、ある日のこと、こうして楽しんでいる最中に、旅人は子供の時と同じように少年の姿を見失ってしまい、彼に呼びかけても返事がなかったので、また旅を続けた。しばらくは誰にも逢わず歩いてしたが、やがて一人の青年に出くわした。そこで、彼はその青年に言った、「ここで何をしているのですか？」すると青年が答えた、「僕はいつも恋をしているんです。さあ、一緒に恋をしましょう」

と言うわけで、彼はその青年と旅に出て、ほどなく見たこともないほど美しい娘——今この隅にいるファニィそっくりの娘——に出逢った。その眼、その髪、その笑窪<sup>えくぼ</sup>はファニィそっくりで、彼女を誉めそやしていると、彼女はファニィのように笑い、顔を赤らめた。当然ながら、青年はすぐにその娘に恋してしまった——名前は伏せておくが、この集いに初めて来たとき、誰かがファニィを見初めた時と同じだった。やれやれ！ 彼は時々彼女にからかわれていた——誰かがよくファニィにからかわれていたように。そして二人は時々口喧嘩をしていた——誰かとファニィがよくそうしていたように。彼らはその度に仲直りし、暗がり<sup>くらがり</sup>に座って毎日手紙を書いた。二人は別れていると気が気でなく、口には出さないまま互いの心確かめようとしていたが、クリスマスの時節に婚約し、暖炉のそばで身体を寄せ合い、結婚も間近に思われた——名は言えない誰かとファニィの立場とそっくりだった！

しかしある日、旅人は前に親しくなった友人と同じように、その二人の姿を見失った。そして戻って来るように彼らに呼びかけても、彼らが現れなかったので、彼は一人で旅を続けた。誰にも出逢わないまましばらく歩いてると、やがて中年の紳士に出くわした。で、彼はその紳士に言った、「ここで何をしているのですか？」彼はそれに答えて言った、「私はいつも忙し

く毎日を過ごしています。一緒に忙しく過ごしましょう」

そこで、彼はその紳士と一緒に、とても忙しい時を過ごし始めた。彼らは一緒に森の中を進んで行った。彼らが旅行したのはもっぱら森の中で、それは旅を始めた時には春の森のように明るく青々としていたが、すでに夏の森らしくこんもりと葉が茂り、暗くなり始めていた。最初に葉をつけた小さな木々の中には、紅葉しかけているものもさえあった。紳士は一人ではなく、彼と同じ年恰好の女性が同行していた。彼女は彼の妻で、二人には子供たちがいて、その子たちも一緒だった。彼らは揃って木々を切り倒し、枝や落葉の中を抜ける道を作り、荷物を運び、忙しく立ち働きながら、森の中を進んで行った。

彼らは時々、深い森に通じる、長くて青々と木の茂る並木道に出た。すると、ほんの少し離れた所から声が聞こえてきた、「父さん、父さん、ぼくも父さんの子供だよ！ ぼくのところで止まってよ！」その後すぐに、とても小さな姿が近づくにつれて、それはどんどん大きくなり、彼らに加わるため走り寄ってきた。その姿が皆の中に加わると、皆はその周りに群がって歓迎の接吻をし、また揃って先へと進んで行った。

彼らは時々、一度に幾つかの並木道に出て、揃って立ち止まっていると、子供たちの一人が「父さん、僕は船乗りになる」と言った。すると別の子が「父さん、僕はインドに行く」と言い、そして別の子が「父さん、僕は出世するんだ」と言い、さらに別の子が「僕は天国に行く！」と言った。それで、惜別の涙に暮れながら、子供たちは独りきりで、それぞれの道を歩んで行った。天国に行くと言った子供は黄金色の空に昇って姿が見えなくなった。

こうした別れが来ると、旅人は紳士に目をやった。紳士はその度に木々の上に見える空をちらっと見ていた。昼の明るさが少しずつ薄れて、日が暮れ始めていた。彼はまた、紳士の髪に白いものが混じっていくのを見た。しかし、彼らはけっして長く休むことはしなかった。まだ旅は終わっておらず、忙しく動き続けなければならなかったからである。

次々と別れが続いて、ついに子供たちが一人もいなくなった。で、残された旅人、紳士、そしてその妻だけが連れ立って森の中を進んで行った。森の木々は黄色に、そして褐色へと変わり、木々の葉も散り始めていた。

彼らはそれまでよりもいっそう暗い並木道に出て、先が見通せないまま道を急いでいると、夫人が立ち止まった。

「あなた」と夫人が言った、「誰かが私を呼んでいます」

彼らが耳を澄ますと、遙か遠くの並木道から「お母さん、お母さん！」という声が聞こえた。

それは、「僕は天国に行く！」と言った最初の子供の声だった。すると父親が言った、「まだ待ってくれ。もうすぐ日が暮れる。少し待ってくれ！」

しかし、髪がすっかり白くなり、涙で顔を濡らす父親の願いを知らぬげに、その声が叫んだ、「お母さん、お母さん！」

すると、すでに暗い並木道の影の中に引き込まれ、連れ去られそうになりながら、彼女は両腕で夫の首を抱き、接吻して言った、「ねえ、あなた、私は呼ばれています。行かなくてはいけ

ません」そして、彼女は天に召された。旅人と夫は二人だけになってしまった。

二人は連れ立って道を急ぎ、やがて森の端まで来た。そこは森の外れで、彼らは木々の隙間を通して目の前に赤く輝く夕日を見ることができた。

しかし、今度もまた、木々の枝を掻き分けて進んでいるうちに、旅人は道連れを見失ってしまった。彼は何度も何度も彼を呼び続けたが返事がなかった。森を出ると、広大な紫色の空に穏やかに夕陽が沈むのが見え、倒木に腰を下ろしている老人に出くわした。で、彼はその老人に言った、「ここで何をしていますのですか？」すると老人は穏やかな笑みを浮かべて言った、「私は、いつも過去のことを思い出しています。さあ、私と一緒に過去を思い出しましょう！」

それで旅人は、穏やかな夕陽に顔を向けて老人の傍に座った。すると旅人の友人たちが静かに彼の許に戻って来て、彼の周りに佇んだ。可愛い子供、美しい少年、恋する青年、父母とその子供たちが皆そこにいて、彼は誰一人失ってはいなかったのだ。彼はその全ての人たちを愛し、全ての人たちに優しく寛大な心で接し、常に彼らの姿を見て喜んでいて。そして彼らも、彼を敬愛していた。私は、その旅人が私たちの尊い始祖であるあなた自身ではないかと思う。こうしたことはあなたが私たちにして下さることであり、私たちがあなたにすることだからである。

## 注

- 1 神々の支配者で、最高の神。雷電を武器とする。妻はジュノー。
- 2 ジュピターの妻で、ローマ最高の女神。結婚の保護神。
- 3 十二夜を祝う菓子で、中に豆または貨幣を入れて置き、豆の入った部分の当たった人が当夜の祝いの司会者になる。

編 集 委 員

岡本紀元・直野裕子・藤本隆康

---

平成20年3月31日 発行

発 行 所 甲南女子大学英文学会  
神戸市東灘区森北町6丁目2-23  
甲南女子大学英語英米文学科コモンルーム  
TEL (078) 413-3124

編集代表 梅 原 大 輔

---